
リ＝ヴァース・ファンタジア

白雨 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リィヴァース・ファンタジア

【Nコード】

N3664X

【作者名】

白雨 蒼

【あらすじ】

新型OS『ジ・アース』に標準搭載され、七年で一〇〇〇万ユーザーを獲得した世界最大規模のMMORPG ファンタズマゴリア。その古参プレイヤーである日口理宇は、ある日見知らぬ空間に立っていた。しかしよく見れば、そこはいつもEVD越しに見ていた画面の向こう——ファンタズマゴリア そのもので、理宇が窓ガラス越しに見た自分の姿は、理宇が普段 ファンタズマゴリアで使用しているPC：リユークそのものだった。

多くのプレイヤー〃《来訪者^{ヒジター}》たちが取り込まれた ファンタズ

マゴリア で彼らは元の世界に戻るため、右も左も分らない状況
の中で奔走する。

異世界&MMORPGトリップファンタジー。

Act 0：オープニング

ただ——その情景を呆然と見ていた。
真っ赤に燃え上がる鉄の塊。

その中に取り残された、二人の大人。
車が衝突した際の衝撃で割れた窓から放り出された少年は、全身を血だらけにしながらもそれでも生きていた。
生きていたから、その情景を見ていることしかできなかった——
望んだわけでもなく。

それは単なる好奇心に過ぎなかった。
ただ、どうしてその輪を動かすだけで思う方向に動くのか。ただそれが気になってしまっただけだった。

——子供の好奇心とは、とても恐ろしい。

それは悲劇だ。
それは事故だ。
そういう言葉で片付けることも出来たし、事実書類上ではそういうことで処理された。

だが——少年の中ではそういうわけにはいかなかった。そんな簡単に割り切れるものではなかった。

十にも満たない子供ではあったが、その子は聡明だった。
それゆえに、自分の仕出かしたことの重大さを思い知ったのだ。
炎上する車。その中で気を失い、生きたまま身を焼かれている二人の——両親の姿。それを少年の脳は深く記憶していた。
記憶の奥底、精神の深淵に深く根付く。

忘れることなど出来はしない。忘れてはならない。

親殺し——それがその幼子の心の奥底に刻み込まれた業。

それが己の罪なのだと、少年は幼くしてそう、自らに言い聞かせ続けた。

——もうひとつの世界で、もうひとつの人生を。

そんなコピーの下にこのゲームは公開されていたなあ、などと僅かな現実逃避が出来ただけでも自分を褒めたいと、その時リウは漠然と考えた。

無論、褒められたことではないが……。

呆然。

忘我。

その瞬間、リウが——曰く理宇が陥った状態を表す言葉は、まさにその二つに極まっていた。

他にあるとすれば、混乱か、困惑か。

目の前で起きた状況を把握する術を失い、ただ眼前に広がる情景を眺め立ち尽くすばかり。

何が起きたのか。あるいは何が起きているのか。両目を瞬たかせてしばし呆然としたままの理宇の耳に聞こえる幾つもの声。あるいは悲鳴。

「うわっ!？」

「なんだこれ!？」

「ちよっと、どうなってるの？」

「此処何処だよ!？」

「俺に聞くんじゃねーよ! こっちが聞きたいくらいだ!」

「一体何がどうなってんのさ!」

「うう……うわーん!」

総合して、それらの声はすべて困惑と戸惑いが色濃く占めており、あるいは現状の理解が出来ず、理解不能な状況に恐慌状態に陥って泣きだす者もいる。

そしてそうでない者たち——明らかに困惑している者たちを遠巻きに見ている人々——の声はみな、困惑の声を上げる者たちに対する不審感に満ちたものばかりだった。

悲鳴、困惑、焦燥様々な声を上げている者は一見ただけでざつと数百。

どの声の主も似たり寄つたりの服装はしているが、その姿形は様々だった。

（……耳が……尖ってる？ 他には……猫耳？ それに尻尾？ やたらと身体が小さい——小人病……じゃ、ないよな……まさか、ドワーフ？）

「——って、ドワーフ？ じゃあ、あの耳が尖ってるのは……エルフか、ハーフエルフなのか？」

理宇は考え至った答えに自分で驚きの声を上げて、改めて目の前で右往左往する人々を観察すれば——今しがた自分が口にした通り、どうにもそこにいるのは普通の人間の姿形とは微妙に異なる容姿をしている者も少なくなかった。

端正な顔立ちをした、耳の異様に尖った青年が膝をついている。

普通なら顔の横に存在する丸みのある耳の代わりに、頭の上に獣特有の三角耳に長い尻尾を生やした痩身の女性が悲痛な面持ちでわめいている。

全体的に敵つく小柄な体躯をした髭面な男が喚き散らす。

そのどれもが、一度は見たことがある姿だった。

その姿は、ファンタジーに一度は魅了された者なら誰だってその種族の名を知っている位に有名な存在。

だが、実際の世界には存在するはずのない人々。

しかし——理宇はその姿を知っているし、見たこともあった。

（そつだ……何度も、何度も見てきた。数えきれないほど、姿を見

ていた)

時間がある限り、理宇はその世界にのめり込んでいた。
広がる世界に思いを馳せていた。

——ディスプレイの向こうに広がる、広大な異界の風景。

そう。そのことに気づいてみれば、今立っているこの場所にも見
覚えがある。あり過ぎる。

——古都ユングファイ。

石畳みの広い道路。ヨーロッパの中世と十九世紀初頭の入り混じ
ったような街並み。古いが壮大な威風たる城の見える、噴水広場。
そこに広がる様々な露天。行き交う人々。

「……そんな……ことって——」
絶句する。

こんなことがあり得るのか——と。

たちくらみを覚えて、青年はよろりと体勢を崩して近くにあった
家屋の壁に背を預け——ふと振り返って窓ガラスを見て、

「……そんな、まさか」

そこに映った姿を見て再び言葉を失った。

自分の目を通してみたはずの自身の虚像。

だが、それは自分ではなかった。

面影はある。確かに目元とか、顔立ちとか、確かに自分のそれに
近い——だが、そこにいるのは自分ではなかった。

ガラスに映るその姿は、自分のものではない。だが、知らない姿
でもなかった。

「——……リユー……グ？」

呟いたその名。

それは理宇があるゲームをプレイする際にメイキングしたキャラクターの名前だった。

——MMORPG ファンタズマゴリア

そう名付けられた。異世界を舞台にファンタジーを題材としたマツブリーマルチプレイヤーオンライン・ロールプレイングゲームアイ・ヴィジョン・ディスプレイ EVDと呼ばれる、ヘッドホンにサングラスを備えた形をした専用ディスプレイを通してPCの視点から世界を垣間見、異世界を疑似体験することのできる新感覚のゲーム性に、多くのユーザーは熱狂し続けている。

七年前にサービスの始まったこのゲームは、当時その業界に突如姿を現し、瞬く間にコンピュータ企業屈指の企業となり、その会社から発表された『ジ・アース』と呼ばれるOSに標準搭載され、『ジ・アース』の発売と同時にサービスの開始されたことで、ネットワークゲームファンだけに留まらぬ様々な方面から注目を浴び、現在では一〇〇万人以上のユーザーを抱える世界でも最大規模を誇るネットワークゲームへと発展した。

毎日更新される数々の新規クエスト。

月に一度は拡張されるマップ。

更にはプレイヤー側からのプログラム公開による新規魔術やアイテムのアップデートなど、その止むことのないイベントの多さや自由度の高さ、そしてゲームとしての難易度とある種のシビアな様々な要素からユーザーは ファンタズマゴリア に魅了され続けていたのだ。

リユージュとは、そのゲーム上で理宇が操作していたPCの名前。

言わば理宇の ファンタズマゴリア 内における分身。

薄灰色の髪に青い瞳。革のジャケット。布のシャツ。布のズボン。今、理宇はそのPCであるリユージュそのものとなっていた。しかもどうみても初期装備の服装だった。

後腰に差している片手剣《ショートソード》も同様だ。

何処からどう見ても、そこに立っていたのは理宇が ファンタズマゴリア に初めてログインした際にステータスグラフィックで見たPCの姿そのものだった。

「こんなことって……」

理宇は改めて確認するように自分の手で顔に触れたのを皮切りに、身体の各所に触れて確かめるが、手を通して、あるいは肌を通して伝わってくる感触は間違いなく自分のものだ。

間違いなく、今自分の意識は此処にあり、触覚を始めとした五感を持つてこの場所に立っている。それだけは確かだった——いや、それだけが確かなことだった。

目に光景。耳に届く喧騒。肌を打つ風の間。鼻腔を穿つ様々な香り……どれも確かに自分の五感が感じ取っている。

「嘘だろ……こんなの——でも、そうだとしたら」

もしかしたら——そう僅かに頭の片隅で生じた疑問を頼りに、理宇は徐にその事柄に対して意識を集中してみた。

「——出た……」

それを「見たい」と意識を集中させた瞬間、ヴウン……という僅かな音と共に、それは理宇の目の前に現れた。

——ステータスウィンドウ。

ミリ単位の薄い硝子板のような物が理宇の眼前へ突如姿を現し、そこには理宇の——リユージュ自身のステータスの詳細が記されている

た。

名前に年齢、種族名称にクラス。

基礎ステータス数値であるHP・MP・STR・INT・DEX・

VIT・RST・AGL・LUC。

戦闘ステータス数値であるATK・MGA・HIT・DEF・MGD・AVG。

装備品。装備品の付属スキル。習得及び現装備スキルと武器熟練度。そして所持品に所持金。

何処までも——そう、何処までもほんの数分前まで理宇がプレイしていたはずのゲームそのものだ。

しかもご丁寧なことに、すべてのステータスが初期化されている。ステータスの上値も、習得スキルも、苦勞して入手した伝説級武器^{エボン}も、素材をふんだんにつぎ込んだプラス補正防具も、億単位で所持していたガルドも様々なアイテムもすべてなくなり、まさしく初ログインした時そのままの状態。

もしこれがゲームの中でのことならば、七年分の苦勞がまさに水泡に帰すと呼ぶに相応しいステータス画面だった。

しかしそんなことに悲しむ暇^{いとま}すらない。これはもしかすれば、今理宇という人間が始めてこの世界に顕現^{ロケイン}したことを意味するのもかもしれない。

そんな——本来ならば絶対にありえないと断言できる推測にすら至ってしまうほどの事態。それが今、理宇が——リユーグが直面している現実^{リアル}だった。

信じられない。

信じたくない。

頭の中で、幾度となくその言葉が繰り返された。

だが、それがもし本当なのだとしたら——

分かっていることは……いや、分かってしまったことは一つ。

今この場にいる自分の姿は――

今、自分がいるこの場所は――

「――僕は今……リユージュで……此处は――ファンタズマゴリアだっというのか……」

それはある種、現実を認識するための呪文のようなものだった。今自分が陥っている状況を言葉にすることで、自らを律するための囁き。

そう呟くことで、そして周囲が未だ混乱に包まれているという事実が、理宇に――リユージュに冷静さを取り戻させる。

周りが驚き過ぎると、自身はそのタイミングを逃して逆に冷静になれるとはよく言ったものだ、リユージュは自嘲気味の苦笑を僅かに浮かべ、

（いかなる事態でも冷静であれ……ね。じーさんも無茶を言う）

祖父の言葉を思い出し、リユージュは苦笑を洩らして佇まいを直す。「でも……本当にその通りだ」

そう呟いた後に僅かな深呼吸。今にも陥った状況に対して恐慌に陥りそうな精神を辛うじて保つ。

だが、どうすればいいというのか。そんな考えが脳裏を幾度も行き来する。

リユージュを――そしておそらくリユージュと同じ状況に陥っているであろう他のプレイヤーの姿に、今自分はいったい何をすればいいのか。そしてそのためにどう動けばいいのかを考える。

リユージュはもう一度自分のステータスウィンドウを見た。そこに表記されている数字とスキル習得欄、そして武器熟練度を再確認し、軽く舌打ちする。

「全部が全部初期値そのものか……これじゃ動くにも広範囲は動け

ない」

いや、そんなものは本当に関係あるのかすら怪しい。

ステータスウィンドウが見れるからと言って、この世界が本当にファンタズマゴリア だとは限らないし、このステータスの数値が一体何処までこのPCの肉体に影響を及ぼし、リユージュと化した理宇の感覚は、何処まで対応するのか。

これはゲームだ。ゲームのはずだ。しかし――

「これが……ゲーム？」

それは自分自身に向けた問いだった。

手を握る際に生じる圧力も、肌を包む衣服の感触も、靴底から通じて伝わる地面を踏み締めている感覚も――

――それをゲームと言って割り切るには、あまりにも生々しく。

現実のリユージュの――即ち日口理宇が現実で生きていた時と何一つ変わりはない本物の感覚が、今いる世界をゲームだと断言することはできないという考えが頭の片隅に生まれる。

五感が伝える感覚は現実^{リアル}そのもので、自分の感覚が麻痺しそうになるのを、リユージュは改めて感じていた。

頼れるものは何もない。

すぐるべき存在は何処にもいない。

あるのは、己の身一つだということ。頼れる者はまさに自分だけだ。

リユージュは必死に自分の記憶を掘り起こし、初めてのログインを思い出す。まず何をすればいいのか。この世界に訪れた自分たち（プレイヤー）が第一に取るべき行動は何だったか。

記憶の中にある攻略法と、BBSに記された数多の書き込みを必死の思いで掘り起こしながら、リユージュは此処に至って始めてその口元に僅かな笑みを浮かべた。何処となくやけっぱちになったような雰囲気醸した、本当に力のない微かな笑み。

「……ホント、ワケ分かんないし」

そう自虐的に呟きを零しながら、リユージュは歩き出した。向かうべき場所は定まった。

何がどうなっているのかとか、自分はどうなってしまったのかとかそう言うのはもう、全部後回しでいい。

今すべきことは、思考停止に安住しないことだ。何もしないで時間をただ無碍に浪費するのだけはするべきではない。

だから、今リユージュがするべきことは一つしかなかった。此処がファンタズマゴリアであり、理宇がリユージュとして初めてログインしたという状況ならば――

「まずはチュートリアル、かなあ？」

あらゆるゲームにおいてのお約束。特にMMOでは必要不可欠なゲームのプレイ方法を懇切丁寧(?)に教えてくれる初心者指導プログラム。

そんなものが今のこの状況で本当に存在するのは定かでないが、とりあえずは行ってみるに限るだろう。なかった場合は、またその時に考えればいい。

今も状況を把握し切れていない数多のプレイヤーであろう人々を後目に、リユージュは一人中央広場に集った集団を遠目に眺める人波に紛れながら歩き出す。

そしてふと、頭上の空を仰ぎ見た。

広がるは雲ひとつない晴天。何処までも続いている果てしなき蒼穹。

曇りない澄み渡った空を見上げ、理宇は――リユージュは今一度深いため息を漏らして髪を掻き上げながら八つ当たるように言葉を吐き出す。

「――もーワケ分かんない」

口から出てきたその言葉に応える者は、誰一人として存在することなく、リユージュは一人トボトボと雑踏の中を歩き続けた。

雑踏に紛れていった灰色髪の少年——それを眺めている者が、一人いた。

同じような灰色の髪に、似たような髪型。造形すらも似通った容姿を持つ、黒衣に身体の要所を守るように備わった軽鎧を身に纏ったその少年は、口元にうつすらと笑みを浮かべ、目元を柔らかに細めて——その背に向けて言葉を送った。

たとえ雑踏を歩む彼に聞こえることはなかるうと——いや、だからこそ、少年はその背に向けて言葉を投げかけた。

「Welcome To Phantas Magoria」

その口から囁かれた到来の祝福を告げる言葉は風に乗って、されど誰の耳にも届くことなく風に乗って消え去り——

——その言葉が告げ終えられるのと同時に、黒衣の少年の姿はまるで始めから何処にも存在しなかったかのように、いつの間にか姿を消していた……。

Act 1：聖人の屠竜

黒い地面まで届く外套を身に纏った、腰まで届く銀髪的青年は右手に握る銃《討狼の銀銃》と、左手に握る《竜牙の黒銃》の銃爪^{トリガー}を絶え間なく交互に引き続けていた。

銃爪が引かれるたびに、銃口からマズルフラッシュがほとばしり、《討狼の銀銃》は《聖銀の弾丸》を。《竜牙の黒銃》は《鱗穿の魔弾》を吐き出し、青年の前に立ちはだかる巨大な体躯を次々と撃ち抜いていく。

青年——ヒュンケルの手に握られている《討狼の銀銃》と《竜牙の黒銃》は、どちらもファンタズマゴリアに置いてレアリティがA A Aランクに分類され、入手するには幾つもの難題をクリアしなければならぬほどの代物であり、その性能は『銃』の中でも圧倒的に高く、銃を扱うプレイヤーにとっては下手をすれば伝説級武器^{エボーン}よりも欲する人間だっているような武器だ。

討狼の銀銃は、装填する『弾丸』に関わらずあらゆるモンスターに対して与えるダメージを上昇させるスキル『魔獣殺し・改』の効果をもつことができ、更に人狼系のモンスターに対してのダメージが自動的に二倍にまで跳ね上がるすぐれものだ。

そしてそこに用いられている弾丸が《聖銀の弾丸》ならなおのこと。死霊系・幻獣系モンスターすべてに対してのクリティカル発生率三十%上昇させる効果を持ち、更に物理攻撃が通用しない亡霊系モンスターに対して、魔術攻撃として適応されるこの弾丸は、一セツト（一つのマガジンに十発）で十万ガルドもする高級品であり、購入可能にするには非常に面倒くさいクエストをクリアした上で数十もある必要素材を納品する必要がある、《弾丸》系では不屈の逸品である。

そしてもう一つの銃である《竜牙の黒銃》。Sランクと言っても過言ではないほどの性能を秘め、何より銃系武器の中で唯一スキル

『竜殺し・改』を宿す《対竜武装》ドラゴン・キラーだ。

種族補正スキルである『○○殺し』系のスキルは様々な存在し、これはそれぞれに適応するモンスター種族を百匹倒せばPCの『パッシブスキル』として習得でき、それらをスキル欄に装備すればそれぞれに適応したモンスターに対してアドバンテージを得ることができる（たとえば子鬼などを百匹倒せば、子鬼系に対して与えるダメージを一・二倍にする『子鬼殺し』を習得できる）。

しかし、その中で習得が困難を通り越し、不可能とされているのが竜系モンスターに対して効果を発揮する『竜殺し』。

これもまた他の『○○殺し』系と同じく、竜を一定数倒せば習得できるスキルだが、ファンタズマゴリアにおいて竜系モンスターは最低でもA級クラスしか存在しない。

モンスターの強さは最低ランクのG級から始まり、F・E・D・C・B・A・A・A・A・A・S・S・S・L・M級と分類される。レジェンダモンスター

MORPGであったファンタズマゴリアにおいて、プレイヤーたちの共通認識としてA級以上の単身討伐は不可能という中、モンスターの中でも最強種である竜系は一際困難な相手であり、それを百体とは無理を通り越して不可能の領域にあった。

ファンタズマゴリアがゲームであった時代、パッシブスキル『竜殺し』を習得できたプレイヤーは指で数える程度。そしてそのいずれもがファンタズマゴリア内ハイ・レベル・プレイヤーで至高存在である《十二音律》に数えられた者ばかりだった。

それだけ習得が不可能なスキルを代行するために実装されたのが『竜殺し』やその上位スキルである『竜殺し・改』などのスキルを宿す武器——通称《対竜武装》である。

ヒュンケルの手にする《竜牙の黒銃》は、その《対竜武装》の一つ。

宿すスキルは『竜殺し・改』。効果は竜系モンスターに対してのダメージを一・五倍にする。

そして撃ち出されている弾丸は《鱗穿の魔弾》は、十%の確率で相手の防御力を無視してダメージを与える効果を持つ、こちらも一セット七六〇〇〇ガルドもする高価な代物だ。

ヒュンケルはそれぞれ高性能の銃を手にして、高価な弾丸を惜しみなく乱射する。

今は出し惜しみしている場合ではない。一瞬でも気を抜けば、敵モンスターの攻撃が襲い来る。かするだけでも致命傷になりかねない威力を秘めた相手だ。

「——おっと」

振り下ろされた巨大な爪を飛び退くことで躲す。振り下ろされた爪は地面を切り裂き、その一撃の重さで地面に巨大なひび割れを生じさせる。

「まったく……一歩踏み込むだけで地震を起こすか……さすがはドラゴンと言ったところだな」

ヒュンケルはそう呟きながら二丁の銃を構え直し、銃爪を引いた。特に狙いは定めず、目の前の巨体に向けて撃つ——それだけで銃弾は確実に命中する。それほどまでに、敵モンスターの姿は巨大だった。

S級竜系モンスター——リビアサレム・ドラゴン。

全長はどれほどだろうか。ヒュンケルの目算では軽く十メートルは超えている。もしこのドラゴンが 原型 となった伝承通りならば、おそらく全長は約十五メートルくらいなのだろうと頭の片隅で考えながら、ヒュンケルは休む間もなく銃を撃つ。

すでに百発以上の弾丸を浴びせているが、リビアサレム・ドラゴンには大きな変化は見られない。ダメージは通っているのだろうが、竜系というのは総HPが圧倒的に高く、物理・魔術攻撃に対しての

耐性も高い。

如何にヒュンケルの持つ二つの銃の性能が高くて、銃というのは弓より威力が高いが射程が短く、魔術に比べて連射性はあるが、一撃の威力では負けるという遠距離武器・攻撃の中では中間的な武器だ。

正直なところ、致命傷を狙う得物としては不適切である。実際、リビアサレム・ドラゴンの頭上に視認できるHPバーの減りは微々たるものだ。

しかしヒュンケルは戦闘方法を変えようとはしなかった。あくまで彼は両手に握る二丁の銃を構えて、リビアサレム・ドラゴンと一定の距離を保ち、つかず離れずの位置でひたすらに銃爪を引き絞る。撃ちされ続ける弾丸の雨がドラゴンの硬い竜鱗を乱打し、ドラゴンは煩わしげに喉を鳴らし、大きく身を反らして息を吸い込んだ。

その動作に、ヒュンケルは小さく舌打ちをしながら二丁の銃を意識のスイッチ一つで瞬時に開いたアイテム欄に送還し——新たに三冊の魔道書を召喚する。

（——間に合え）

半ば願うように三冊の魔道書を自分の周囲に浮遊展開し、そのペーじが高速でめくられていく。パッシブスキル『詠唱短縮』による発動までの時間短縮。術式が瞬時に構築されて行き、ヒュンケルの周囲に幾重もの光を放つ魔法陣が描かれる。

「——《スヴァジルファリ・デウン》」

口頭でヒュンケルが魔術を発動させると、ドラゴンがプレス攻撃をしてきたのはほぼ同時。

ヒュンケルを囲うように現出した五重の魔力障壁が、ドラゴンのプレスを紙一重のタイミングでせき止める。三冊の魔道書から生み出された上級防御魔術《スヴァジルファリ・デウン》は、北欧神話のアスガルドを囲う城壁を築いた者の名を冠した防御魔術で、物理・

魔術・属性あらゆる攻撃を遮断する効果を持つ、ヒュンケルの誇る最高の防衛手段。大抵のモンスター戦闘に置いて比類なき守りの盾となる魔術。

ドラゴンのプレス攻撃が終わり、ヒュンケルは瞬時に《スヴァジルファリ・デウン》を解きながら走り出しつつ、自分の周囲に浮遊する三冊の魔道書を一瞥して舌打ちする。

見れば彼の周囲を漂う魔道書三冊のうち、二冊が黒ずんでいて使い物にならない状態と化していた。

（プレス攻撃の一回でBランクの魔道書二冊の耐久率がゼロになるか……こりや大赤字かもしれないな）

使い物にならなくなった魔道書二冊をその場で廃棄しながら、ヒュンケルは再びウィンドウを開き、アイテム欄に魔道書を戻すと今度は右手で《竜牙の黒銃》を取り出し、更に左手には一振りの槍を握り締めた。

銀に黒の装飾が施された、本来なら両手で持つほどの大きさを持つ長大な槍。しかし、その槍は見た目に反して武器の分類は投擲槍とされている。

ヒュンケルは《竜牙の黒銃》を撃ちながらドラゴンを牽制し、隙を窺いつつ、槍を握る左手で溜め動作する。

同時に幾発かの銃弾が竜の顔を捉え、リビアサレム・ドラゴンはその攻撃を鬱陶しいとでも言うように、僅かに鎌首をもたげる。

転瞬——ヒュンケルが渾身の力を込めて槍を投擲した。

投げ放たれた黒銀の槍は大気を穿ち、轟々と唸りを伴い、そして眩いほどの雷光を纏ってリビアサレム・ドラゴンの体躯へ吸い寄せられるように的中する。

同時に響き渡る落雷の如き轟音——まさしく雷鳴そのものが穿つたようにリビアサレム・ドラゴンの身体から響き渡る。

次いで竜が悲鳴とも絶叫ともつかない声を上げた。

ヒュンケルの口元が、此処にきてしたやったりと笑みを浮かべる。その左手には、つい先ほど投擲したはずの黒銀の槍が握られていた。ファンタズマゴリアにおける投擲槍を始めとした投擲武器は、すべて等しく消耗品扱いとされている。だが、ファンタズマゴリアの中で、唯一その例外に存在する投擲槍が、僅かに一本だけ存在する。

正確に言えば二本——だが、そのうちの一本は詳細はおろか、それが本当に実在するのかすら定かではないといわれるほど不確か故にプレイヤーたちは一本と嘯いている。

——レジェンタリーウェポン ゲンゲニール
伝説級武具《貫く王の雷槍》。

武器分類は《投擲槍》。属性は雷。

ヒュンケルの持つ槍は、世にそう呼ばれている ファンタズマゴリアにおける最強種の武器の一つ。

最大の特徴はウェポンアビリティ『無限回帰』。神話に伝わるゲンゲニールの特性をそのまま体現したかのように、投擲した槍は持ち主の手へと回帰するという、決して失われることのない投擲槍。その槍を握りながら、ヒュンケルは《貫く王の雷槍》の一撃を受けて悶え苦しんでいるドラゴンを見上げて叫んだ。

「今だ、リユージェ！」

ヒュンケルの大音声と共に、鬱蒼と茂る山森の中から飛び出す影があった。

灰色の髪に青い瞳を持った、膝丈ほどあるフードの付いたコートに身を包む青年が、両手に握る二振りの剣を構えてドラゴン目掛け

て突進する。

その手に握られているのは、ヒュンケルの持つ銃——《竜牙の黒銃》と同じ《対竜武装》であり、その代表格ともいえる片手剣《ドラゴンスレイヤー》。付与スキルは『竜殺し・改』

二本の《ドラゴンスレイヤー》を手にし、青年——リユーグはAGLパラメータ補正の限界に挑むかのような速度で疾駆し、木々の間を抜けてリビアサレム・ドラゴンの懐へ瞬く間に突撃するや否や、その二振りの剣を容赦なく振り抜いた。

《ドラゴンスレイヤー》二本による通常攻撃が叩き込まれ、ヒュンケルの銃撃ではびくともしなかったドラゴンの体躯が僅かに揺れる。

（——よし！）

視界の片隅にわずかに表示された『Critical』という言葉葉に、リユーグは胸中で小さく頷くと、そのまま攻撃の手を休めず連続で左右の剣を交互に振り抜く。

右の袈裟。左の切り上げ——その勢いを殺さず生かし、身体を一回転させて右を払い、更に左を逆袈裟に振り抜く。流れるような動きから放たれる剣撃の最中、リユーグは意識上でスキル欄を開き、事前登録してあるスキルを選択。

二刀がそれぞれライトエフィクトに包まれ、リユーグの身体はシステムアシストによって自動的に記録されている動きを再現する。

二刀流下位アーツ・スキル《双連撃》デュアルエッジ。

怒涛の四連続斬撃がドラゴンの体躯に叩きこまれ、ドラゴンが悲鳴を上げた。だが、リユーグはその声を無視し、更にそこから連撃チェインする。脳裏のスキル欄に描かれた技連樹式——《双連撃》から派生する幾つものアーツ・スキルの中から望む技の一つを選択。

リユーグの全身が淡い光に包まれ、新たなシステムアシストがりユーグの身体を瞬時に動かす。

二刀流中位アーツ・スキル《驟雨斬穿》スラストレイン。

刺突と斬撃による八つのライトエフィクトを纏った剣撃が、ドラ

ゴンの体軀へと叩きこまれた。

ファンタズマゴリア には、武器熟練度で習得する攻撃スキル——アーツ・スキルと、魔術スキル——バースト・スキルの二つが攻撃手段として存在する。

そのうち武器攻撃によるアーツ・スキルは、更に大きく分けて『下位』『中位』『上位』『奥義』の四段階分類がされ、これらは下位のスキルから上位のスキルの順に最大で四回連携することができ、これが『連撃』と呼ばれるシステムである。

リユージュはそれを行使し、二刀流アーツ・スキルの中でも圧倒的にHIT数の高い剣技を連続して叩き込む。

手数重視の技はその性質上威力が低く設定されているが、そこは二振りの《ドラゴンスレイヤー》が十二分に補ってくれる。

リユージュは《驟雨斬穿》が終わるのと同時に更なる上位の技を選択——リユージュの身体を包んでいた淡い光が輝きを増し、剣を包んでいたライトエフィクトがリユージュの全体にまで及びながら剣技を発動させる。

二刀流上位アーツ・スキル《シュタルガー・ヴァント烈風裂牙》。

刹那、剣舞と共に剣圧から生じた風が巻き起こりドラゴンの体軀に幾つもの傷を負わせた。

二刀流上位アーツ・スキル《烈風裂牙》——怒涛の十二連撃。二刀流上位の中でも屈指のヒット数を誇る風の属性を宿す剣技は、振り抜かれる左右の剣から生じる凄まじい剣風がそのまま斬撃となり、標的対象を多方面から一斉に切り裂く包囲技だ。

しかし今回は標的が大きすぎるが故、斬撃はすべてドラゴンの身体を多重で切り刻む結果となった。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

裂帛の気迫と共に、リユージュがドラゴンの懷により深く飛び込む。剣風の嵐がドラゴンを刻む間隙を縫い、リユージュは力強く地を蹴って跳躍——否、飛翔して技連樹式の四段目——即ち奥義の覧からただ一つを選択する。

リユージュを包むライトエフィクトが眩いほどの輝きを放ち、システムアシストが怒涛の勢いで剣をリユージュに剣を振るわせた。

錐揉みを描くように身体を回転させ、その勢いに乗せて二刀の剣が螺旋を描く衝撃波を放った。

——二刀流奥義アーツ・スキル《ドラグ・アーセフアー画竜点睛》。

二刀流アーツ・スキルにおいて幻と云われているアーツ・スキルが炸裂する。

螺旋を描く、疾風怒濤の大回転斬り。幾重もの剣閃が描く斬撃は文字通り嵐の如く唸りを轟かせ、巨大なドラゴンの体躯を宙へと打ち上げる。

《画竜点睛》。二刀流アーツ・スキル——否、すべてのアーツ・スキルに置いて他の通髓を許さない最大のヒット数を誇る二刀流剣技の奥義。

ファンタズマゴリア がゲームであった時代、公式サイトが公開していたアーツ・スキル一覧の中で、誰もがその習得を夢見て挑み、だが結局誰一人として習得することのなかった幻のアーツ・スキルの一つ。

その習得内容はいたって単純だが、それゆえに不可能に等しい『単身での二刀流装備による竜系モンスターの一〇〇匹の討伐』である。

スキル『竜殺し』ですら習得は困難を極めると言われている最中、この習得方法はそれに輪をかけて無茶を通り越し絶対不可能と言えた。

正しく『云うに易し、成すは難し』だ。

しかし、リユージュはそれをやってのけた。まだ ファンタズマゴリア がゲームであった時代では不可能だった《画竜点睛》の習得

を、現実から ファンタズマゴリア という異世界に迷い込んだ後に、幾つもの死線を超えて、己が技と身につけた。

それはすべて——この時のため。

ただこのリビアサレム・ドラゴンを討伐するがためだけに、リユークは死に物狂いで竜という竜を単身でひたすら討伐し続け——その果てに《画竜点睛》を習得したのだ。

その理由はただ一つ。《画竜点睛》の特性である、『竜特效』。竜系モンスターに対して絶対的攻撃力を発揮する特殊効果。

奥義アーツ・スキルの中には稀に、一定種族の敵に対して一方的な優位性を持つスキルが存在し、《画竜点睛》がその一つ。

リユークはリビアサレム・ドラゴンを倒すただけにひたすら竜を狩ることに徹し、百の竜を単身で討ち、『竜殺し』のパッシブスキルと《画竜点睛》のアーツ・スキルを身につけ、《対竜兵装》である《ドラゴンスレイヤー》を金銭の限りをを用いて購入し——そして現実にいた頃から、そしてゲームであった時代から冒険を共にしてきたヒュンケルを伴って挑んだのだ。

それだけの前準備を行い、万全を期しての挑戦だ——何せゲーム時代とは違って、HPがゼロになっても古都ユングフィの教会で復活——ということにはならないのだから……

今まで耳にした情報で、死んだPCが復活したという話は、一度も——ない。

パーティを組んだメンバーの一人がHPをゼロにした後、そのパーティがすぐにゲームであった頃に復活場所であった教会に赴いたが、そのメンバーが復活することは終ぞなかったらしい。

結局酒場やギルドの集会以て広まっていた眉唾ものの噂話でしかなく、それが真実かは杳として知れないが、その可能性がゼロとは

誰一人として言えない。

無論、HPをゼロにすれば現実に戻れるのではないかという憶測もないわけではなかったが、誰も試そうとする者はいなかった。当然だ。五感を始めとした全ての感覚は、現実のものと何一つ変わらないような状況下だ。下手をすれば本当に死ぬ可能性がある異常、そんな命がけの度胸試しをする馬鹿はいない。

何より、戦闘でHPがゼロになっても復活しないという噂が広まっているのだ。そんなハイリスクローリタールな実験を行うのは自殺と同じだった。

だからこそ誰もが忌避する。HPがゼロになることを。

そこから直結する、死という恐怖を。

故に、今このファンタズマゴリアに取り込まれているプレイヤーたちのほとんどは戦闘することを避け、モンスターの出現しない、結界に覆われた都市などに引きこもる始末である。

そして、それだけのリスクを考慮してなおフィールドに出てモンスターと戦い、パラメータを成長させて強くなるうとする者も少なくはなく——そしてリユージュとヒュンケルもその輪の数に含まれる。死という最大のリスクを背負ってでも 結界の外に赴き、モンスターと戦う。

死なないために。

戦って勝つために。

勝って生き残るために。

リユージュはそのために、このリビアサレム・ドラゴンに挑んでいる。

かつての——それこそゲームであった頃のファンタズマゴリアに追いつくことが、その第一歩だと思った。

——だから、この竜を討たねばならない。

パッシブスキル『竜殺し』に《対竜兵装》である《ドラゴンスレ

イヤー》、そして竜系に対して威力を上げる《画竜点睛》の組み合わせによる多重竜特攻——対種族効果により相乗された特大攻撃を受けたリビアサレム・ドラゴンの身体が大きく傾ぎ、その巨体が放物線を描いて地面に落下する。

飛翔しながら回転切りを打ち出す《画竜点睛》のシステムアシストで空中に舞い上がったリユーグが、上空から重力の手に引かれて自由落下しながらリビアサレム・ドラゴンを見下ろす。

ヒュンケルが延々と銃撃でHPを削ってはいたが、それは微々たるものだ。寸前の《貫く王の雷》によるクリティカル攻撃でもどれだけのHPを減らすことができただろう。

一割か、二割か。それだけ削れていたら僥倖と言えるだろう。

なにせ二人でこのS級ドラゴンに挑んでいるのだ。しかもフィールドやダンジョンに時間経過で復活するようなランダムエンカウントのモンスターではなく、しかも一回限定クエストによるクエスト限定モンスターだ。並のS級ドラゴンなどよりも遥かに強靱強大凶悪な性質を持つこの竜が、如何に《貫く王の雷槍》の直撃と《ドラゴンスレイヤー》二本を用いた大多数連撃を叩き込まれたとしても倒れると思うのは思い上がりもいいところ。

——さあ、どう動く？

胸中で呟きながら、リユーグは左右の《ドラゴンスレイヤー》を握り直す。同時に、

ぎろり……

倒れていた竜の眼がリユーグを捉えた。まなこ眼光のそれだけで、リユーグの背筋に冷たい物が走る。

竜の爪。

体制を立て直したりビアサレム・ドラゴンの腕が大きく振り払われ

る。中空で無防備なリユーグ目掛け、空気を薙ぎ払い、掠っただけで人の身など紙きれの如く容易に切り裂くであろう三爪がリユーグを襲う。

「ちい……！」

向かい来る竜の爪を見据え、リユーグは両手に握る二刀を大きく振りかぶり、

「破っ！」

裂帛の気迫と共に、今まさにリユーグ自身を切り裂こうとした爪へ剣を叩きつける。竜の巨軀から繰り出される必殺の爪と、リユーグの渾身の二刀が競り合い、わずかの間に拮抗——転瞬、リユーグの身体が弾き飛ばされて地面に叩き落とされ、数回バウンドして勢いが止まる。

最初の落下で背中を強打し、息が詰まる。肺の中の酸素が全部吐き出され、一瞬だが確かに呼吸が止まったのを感じながら、リユーグは自分の身体に鞭打って強引に呼吸を整え立ち上がる。

竜の爪撃自体は、二刀を叩き込むことで強引にパリィに成功はしたためダメージはない。だが高所から叩き落とされたことによる《落下ダメージ》でHPが一割ほど減少した。ただの叩き落としてHPの一割も持つて行かれることに改めて相手の凶悪さを再認識しつつ、リユーグは未だ爪を振り抜いた姿勢のままにいるリビアサレム・ドラゴンに向けて二刀を構え、アーツ・スキルを選択。振り抜かれた二刀による斬撃の軌跡が、そのまま刃と化してリビアサレム・ドラゴンへと飛来する。

二刀流中位遠距離アーツ・スキル《ツイン・イエーガー双破飛刃》。

左右順に飛び、それぞれ異なる軌道を描きながら放たれた斬撃。一つがリビアサレム・ドラゴンの右足に、もう一つがその背に生えた巨大な翼の片方に叩きこまれ、ダメージを叩き込む。

先の連撃に比べれば微々たるダメージ量だが、リユーグたちにとって攻撃を叩きこめる隙があるのならば、一瞬たりとも攻撃の手を休めるわけにはいかない。

リユーグの《双破飛刃》がリビアサレム・ドラゴンに命中するの
に合わせ、ヒュンケルもまた周囲に転嫁している魔道書を行使し、
幾つもの魔術を連続発動させて強襲する。

火炎の嵐が躍り、幾つもの雷光が竜の身体を貫く。その間隙を縫
うようにしてリユーグもリビアサレム・ドラゴンの懷に飛び込んで、
《ドラゴンスレイヤー》を連続して叩き込む。

ヒュンケルの広範囲魔術による絨毯爆撃と、リユーグの二刀によ
る隙の生じぬ連撃がリビアサレム・ドラゴンを容赦なく襲う——だ
が、リビアサレム・ドラゴンはそんな攻撃などものともせず、全身
を奮い立たせて咆哮を上げる。

空気すらも振動させる巨大な竜の雄叫びが二人の身体を強打する。
ダメージ判定など存在しないはずの、ただの雄叫び。だというのに、
二人にはまるでその咆哮が物理的な圧力を以て襲いかかってくるよ
うな錯覚すら覚え、二人揃ってその表情を驚愕の色に染めて身体の
動きを縛る。

その人間を圧倒する竜の威厳——そこから生じる威圧感が咆哮に
よって顕著となり、リビアサレム・ドラゴンの纏う気迫に気圧され
た。

ゲームであつた時でもこの竜の強さに感嘆したが、これほどまで
に気圧されることはなかっただろう。ファンタズマゴリアとい
う異世界に取り込まれて、自分自身の目で見て、五感で体感して、
対峙して——本当の意味で、この竜の強さを身を以て思い知る。

（彼のゲオルギウスも、こんな感覚に苛まれていたのかな？）

『黄金伝説』に謳われる数多の竜を屠った聖人の心境はこんなもの
なのだろうか、そんなことを頭の片隅で考えてしまい、リユーグは
わずかに微笑む。

是非とも肖りたい。胸を借りたい。そんな気分だつた。

そして、そんな僅かの無駄な思考がリユーグの判断を僅かに鈍ら
せ、それが隙となり現実的脅威と化して具現する。

「避ける！」

ヒュンケルの声に、リユーグは即座に反応して視戦を動かし——自分の失態に舌打ちする。

——竜尾。

いつの間にか体を反転させて、リユーグの身体の十倍近い太さの尻尾を天高く持ち上げて、それを横に薙ぎ払っていた。ゴウッ！という風の唸る音が聞こえた刹那、リユーグはほとんど反射で身体を動かして大地を強く蹴った。

わずかな差で、リユーグの跳躍の方がリビアサレム・ドラゴンの薙ぎ払いより早く、リユーグの身体は空中へと舞い上がる。足元を竜の尾が通り抜けていくのを見ながら、リユーグはふと視線を上上げ——咄嗟に剣を眼前で交差させた。

「があっ!?!」

衝撃が剣を通してリユーグを貫く。いつの間にかリビアサレム・ドラゴンの顔が目の前にあり、竜の頭部はそのままリユーグを打ち上げるように首を振り上げたのだ。

とっさに防御したが、それでもすべてのダメージを防ぎ切ることには出来ず、防御を貫通してきた衝撃に息を詰まらせながら手首を捻り、《ドラゴンスレイヤー》の刃を竜の鼻面に立てて腕を引く。

ザシュッ、という小気味良い切断音と共に、リビアサレム・ドラゴンの鼻から血が吹き出す。

——グルル……

竜が、嘶く。

背筋に冷たい物が伝い、全身の産毛が総毛立つのを感じ、リユーグは霧払った姿勢のまま息を呑んだ。

——急げ。

そう本能が警鐘を鳴らすのを感じ、リユーグはまだ虚空から剣を振り抜くことで勢いをつけて地へと舞い降りる。

足が地につくのと同時に、竜の巨軀が起き上がり射殺するような眼

光がリユーグを貫いた。リビアサレム・ドラゴンがその長い首を大きく反らす——しかしその眼光は僅かもリユーグから外れることはなかった。度重なる連続攻撃により蓄積された敵愾心^{ヘイト}が、リビアサレム・ドラゴンの標的認識をリユーグへと完全固定している。

その巨体から溢れ出す——現実味を帯びた殺気に身震いしながら地を蹴って後ろに飛ぶ。

「馬鹿野郎！」

ヒュンケルのその言葉が聞こえたのと同瞬、竜の顎^{あぎて}が大きく開かれた。その口腔内から覗く紅蓮に目を剥きながら、自身の失態に舌打つ。

すべての竜系モンスターに共通するプレス攻撃の予備動作。

だが、そのことに気づいてもすでに手遅れだった。バックステップの着地から横に飛ぶよりも早く、リビアサレム・ドラゴンのプレス攻撃のほうが早い。

リユーグの足が再び地につくのと、リビアサレム・ドラゴンのプレス攻撃が放たれたのは同時だった。

（——ヤバイ！）

思考が即座に回避から防御へと移行し、それよりもさらに早く、本能が肉体を動かしリユーグが防御動作に走る。

このプレスだけでどれだけのHPが削られるか。あるいは咄嗟の防御でどれだけダメージを軽減できるか——頭の片隅でそんなことを考え、

「——この超度級馬鹿が！」

その声が思考に——そしてリユーグとリビアサレム・ドラゴンの間に割り込んだ。

「ヒュンケル！」

リユーグは慌てて飛び込んできた相棒の名を呼ぶ。しかし彼はそれに応えることなく両手を翳し、周囲に展開した魔道書に指令を叩

き込むと同時に防御魔術を展開した。

対火属性防御上級魔術《ジャールキイ・パノプリア》。

ヒュンケルを中心に展開された、炎を完全に断つ半球状の光が二人を包みこみ、次の瞬間、二人の周囲もろとも焼き払うドラゴンのブレスが辺りの木々や地面すらも一切の関係なく焼滅させる。

周囲が焼き尽くされる情景を垣間見て、改めて此処がゲームなのか現実なのかの判断に困惑しかけるリユージュの思考を、ヒュンケルの叱責が容赦なく遮断した。

「ボサつとしてるんじゃないやねーこの馬鹿！ 死ぬ気がボケナス！ いや、いつそ死ぬか！？ このままこの竜の炎の中に入って美味しく料理されるのがお好みか？」

怒涛の勢いでまくしたてるヒュンケルの暴言の嵐に、リユージュはいたたまれないというように視線を反らして溜め息交じりに謝罪する。

「済まない。どう対処するか考えてて、反応が遅れたんだ」

「その反応が遅れただけで、お前の命は風前の灯火というか、蠟燭もまとめて瞬時に滅されるところだったのを理解しているのか？」

まったくだ。

自分の行動の失敗を理解しているが故、リユージュはヒュンケルにただただ頭を下げた。

「本当に済まない。ありがとう、助かった。だからこれ以上の説教は勘弁して」

「今回のクエストで使った弾丸の費用はすべてお前持ちで手を打とう」

返ってきたヒュンケルの無慈悲な言葉に、リユージュは目に見えて狼狽し、その蒼い瞳を見開いて悲痛な面持ちになる。

「ちよっ！？ 僕、このクエストのために有り金全部《ドラゴンスレイヤー》の買い込むのにつぎ込んだの、知ってるだろう？」

「命より高いものなんてあるのか？」

その言葉に、リユージュは息を呑んだ。表情がこわばり、文字通り

言葉もなく俯くを見て、ヒュンケルは自らの言葉選びの間違いに気づく。

しかし口にした言葉を撤回することも出来ず、僅かに逡巡した後、視線をリユージュからリビアサレム・ドラゴンへと向け、

「ブレスの時間は五秒。それが終わったら同時に防御を解く。いつでも反撃できるようにしておけ」

結局何も言葉に出来ず、ただただ事務的なことだけを口にした。

わずかに、リユージュは矢次に告げられた言葉で呆気にとられたが、すぐに我に返って一度頷くと、即座に思考を切り替えて両手の《ドラゴンスレイヤー》を強く握りしめる。

左手の剣を地面に突き立て、リユージュはアイテムウィンドウから《MPポーション》を取り出して、緑色の瓶を手にとってそれを口にする。中の液体を飲み込み、脳裏に描かれる三分の一まで減っていたMPゲージが右端まで回復していくのを確認しながら立ち上がる。

「いつでも行けるよ。そっちは援護よろしく」

「奴のHPもさっきので四割方減らしている。そろそろ決めるとしよう」

「《ドラゴンスレイヤー》四本がすでにご臨終されてるしね」

所持金のすべてを投資して購入した六本の《ドラゴンスレイヤー》も、気づけばすでに最後の二本となっている。リビアサレム・ドラゴン討伐のためとはいえ、手痛い出費なのは確かだった。

「今後の利益を考えれば安い買い物だと思って諦める。こいつさえ倒せば、もう高い金払って《対竜兵装》を買う必要はなくなるのだからな」

「分かってるよ。それだけにこのクエスト、失敗は出来ないんだからさ」

「まあ、失敗はそのまま俺たちの死に直結する。此処で死ぬ予定はないから、確実に仕留めろ」

「合点」

ヒュンケルの鼓舞に、リユーグは短く答えて首肯する。同時に竜の吐き出したブレスが止み、周囲を呑みこんでいた猛火が消え去った。

同時に、ヒュンケルの《ジャールキイ・パノプリア》が消え去り、ヒュンケルは消し炭になった魔道書三冊を廃棄して新たな魔道書を二冊虚空に展開し、右手に《竜牙の黒銃》を握りながら叫ぶ。

「行つてこい！」

その怒号を合図に、リユーグは地面を強く蹴って疾駆する。

疾駆しながら左右の剣を構え、スキルウインドウから二刀流アーツ・スキルを選択。

二刀流中位アーツ・スキル《猪突猛进》シュテীア・ベルセ。

突進系に分類される、二刀流アーツ・スキルの中では珍しい単発技だが、敵の防御貫通性能が高く設定されており、防御の高い相手であっても切り崩すことのできる『重さ』の乗った剣撃が、リビアサレム・ドラゴンの無防備な身体に叩きこまれ、ズン——という鈍重な音を響かせ、攻撃硬直後の竜の身体が再びリユーグの剣で傾ぐ。

此処だ。

直観が身体を動かし、思考が即座に技連樹式に描かれるアーツ・スキルを選択——連撃へと繋ぐ。

僅かに体を開き、左右の剣それぞれを、半呼吸分間隔を開けて振り抜く。右、左、再び右、再度左。

開いていた間隔は徐々に短くなり、やがてそれは零になり——元々のリユーグ（理宇）の身体能力にSTRパラメータ・AGLパラメータ・DEXパラメータの補正が合わさり、その剣速はシステムアシストをも凌駕する速度で振るわれ続ける。

霞むほどの速度で振り抜かれる刃が、幾重もの軌跡を生む。

銀色の斬刃が躍り、舞い、無数に繰り出されたはずの斬撃はシステムアシストの放つ光を呑み込み極彩色の輝きと化し、巨大な斬撃——否、一つの刃そのものと化してリビアサレム・ドラゴンへと叩

きこまれる。

二刀流上位アーツ・スキル《ソノールス・イルシオン千刃一閃》。

リユーグの持つ二刀流アーツ・スキル単発技の中で最強の技がリビアサレム・ドラゴンを襲う。

撃ち出された巨大な斬撃場は三日月を描き、アーツ・スキルに設定された視覚表現エフィクトが空間すらも斬断するかのように衝撃が走る。そのただなかに放り込まれた竜は、文字通り絶叫をその口から吐き出した。

それと同時に、リユーグは左の剣を背に回し、右の剣の切っ先を自身左足元に引き寄せる。

「ヒュンケル！」

構えを取りながら、リユーグは友の名を叫んだ。それだけですべてが伝わる——そう確信を持って。

同瞬、リユーグの頭上を一条の稲光が飛び越えていく。

ヒュンケルの投げ放った《貫く王の雷槍》の渾身の一撃が、再び吸い込まれるようリビアサレム・ドラゴンの額を穿つ。その様はまさに雷の如く——槍が竜の身体を捉えたのと同時に空気すら震わせる雷鳴が響き渡り、空気を貫き、音の壁を貫き、そして竜の鱗すらも貫く衝撃はリビアサレム・ドラゴンをその一撃の下に昏倒状態ノックダウンさせる。

「流石！」

ここぞのタイミングでリビアサレム・ドラゴンを気絶状態に持ち込んだヒュンケルの運の良さに心から称賛の言葉を叫んで、リユーグは地面を蹴って倒れ行く竜へと肉薄する。

同時にリユーグの手にする左右の《ドラゴンスレイヤー》を魔法陣が包み込み、剣身が金色の輝きを纏う。

上位戦闘補助魔術《ソード・オブ・ヴァーミリオン》。

二振りの《ドラゴンスレイヤー》を包むヒュンケルの魔術を見て、リユーグはにやりと口角を吊り上げる。

（……まあ、これでこの二本も粗大ゴミ確定か）

そう内心で頂垂れて、二本の剣に訪れる結末を儚んだ。

ヒュンケルの施した《ソード・オブ・ヴァーミリオン》は、武器に力を付与させる補助魔術だ。その効果は『次の攻撃の際、武器によって与えられるダメージが五倍になる』という武器戦闘をする際にはとてもありがたい効果を施してくれるのだが、デメリットとして《ソード・オブ・ヴァーミリオン》を施した武器は次の攻撃の終了と同時に耐久度がゼロに——つまり武器が廃品化ジャンクするということんでもないマイナス面を持つ。

そのため武器攻撃力強化系魔術の中では最強の威力を持ちながら、そのデメリット故に全くと言っていいくらい使用・習得されない補助魔術の最高峰とも呼ばれているこの魔術を、ヒュンケルはさも当然のようにリユーグの《ドラゴンスレイヤー》に施した。

（確かに次で仕留めるならこれくらいいしないといけないだろう。けれど！ けれど……うう……）

耐久度がまだまだ残っていた《ドラゴンスレイヤー》を、次の一手で失うのは正直心苦しいというのがリユーグの本音。

だからこそ、この一撃で決める。

それがこの剣たちに出来る最大の敬意。

リユーグはリビアサレム・ドラゴンの足元に滑り込むように駆け込みながら、技連樹式で繋がった奥義アーツ・スキルを選択する。

システムアシストの眩い輝きがリユーグを包み、リユーグは身体を大きく回転させながら剣を振り抜く。

回転から発生した剣圧は衝撃の刃を生み出し、それは無数の斬撃となって巨大な一つの嵐と化してリビアサレム・ドラゴンを襲う。

二刀流奥義アーツ・スキル《画竜点睛》。

再び放たれた二刀流の奥義。竜を屠る剣閃の嵐は一切の容赦なく昏倒状態となった竜を呑み込む。

スキル効果や《対竜兵装》——そして《ソード・オブ・ヴァーミリオン》によって更なる強化を施された必殺の剣——いや、《画竜点睛》に込められたリユーグとヒュンケルの『滅殺』の意志に応える

かのように、斬撃の嵐はリビアサレム・ドラゴンのHPバーを見るうちに減少させていく。

——いける！

剣を振り抜きながら、リユーグは心の中でそう強く祈る。

やがてシステムアシストによる《画竜点睛》の動きが止み、リユーグの身体が虚空に投げ出されたまま静止する。

両手に握る《ドラゴンスレイヤー》が、音もなく無数のポリゴンが僅かな残滓を残して四散するように消えていくのを感じながら、リユーグはその視線を一切剣には向けず、眼前で今もなお「画竜点睛」の斬刃に刻まれHPを減らしていくリビアサレム・ドラゴンのHPバーに向けられていた。

斬撃がヒットする音が連鎖的に鳴り響き、そのたびにリビアサレム・ドラゴンのHPが減少していく。単純計算で約八十倍にまで跳ね上がったダメージ量はそれだけの威力を願って放ったリユーグにしても圧倒的な威力を誇り、膨大なHPを持つリビアサレム・ドラゴンのHPを徐々に食い散らして行き、六割近く残っていたはずのHPはほとんど焼失し、HPバーの色が緑から黄色へ、黄色からついに赤へと移る。

空中に投げ出されていたリユーグの身体が、再び重力の手に引かれて地面へと降りていく。その間も視線はHPバーを仰ぎ見たままだったが、願うようなリユーグの表情が一気に渋面へと変わる。

悔しげに舌打ちをしながら、リユーグはその視線をリビアサレム・ドラゴンのHPバーから地面へと一転させる。

あと一歩というところで、《画竜点睛》の斬撃が終わりを告げたのだ。最大ヒット数二十四ヒットを誇る斬撃の嵐は、無数のスキル効果や付与魔術の効果により致命傷を与えるほどの威力を発揮したが、わずかだが必殺には届かなかった。

残ったのは目測でわずか数ミリ程度のHP。数値にすれば数万程度のHPがリビアサレム・ドラゴンを生かした。

そしてダメージ判定の終わった竜系モンスターは、ダメージ硬直

を無視してすぐに体勢を立て直して反撃に出てくる特性を持つ。当然リビアサレム・ドラゴンもその例に漏れない。

そしてその体勢を立て直したリビアサレム・ドラゴンに蓄積されたりリユーグへの敵愾心に基づき、眼窩で今もなお着地に至っていないリユーグへと向けられるのは、ある種当然の結果だった。

竜の顎が大きく開かれる。一瞬プレス攻撃かと思ったが、その予想は外れだった。プレス特有の溜め動作もなく、大きく開かれた口内に並ぶ巨大な刃のような牙による噛み付き攻撃。それに気づいたリユーグの表情は一瞬で蒼白に染まる。

今のリユーグにとって、この世界はゲームであってゲームではない。もう一つの現実だ。当然五感の本物と言っている——それはこの世界に来て嫌というほど痛感している事実。当然ながら痛覚だって本物。

流石に噛み付き攻撃の一回でリユーグのHPをゼロになる可能性はクリティカルヒットでもない限り不可能だろう。だが、たとえばHPがゼロにならなかつたが、あれだけ図太く鋭利な牙が乱立する口で噛み付かれれば、一体どれだけの痛みが伴うのか——想像するのも愚かしい。

——あんなもの、絶対に食らいたくない！
それがリユーグの本音だった。

だが、無防備な空中では回避することは不可能。パライするにも今は武器がない。格闘スキルはあるが、素手でどうにかできるような攻撃だとは思えなかつた（出来たとしても不可能）。

そんなことを考えている間に、竜の牙は目前に迫っていた。リユーグは全身に食い込み想像を絶する痛みが来るのを覚悟し——ならば決して視線だけは逸らすまいと悔しげに竜を見上げる。

「リユーグ！」

ヒュンケルの声が耳朵を叩いた。同時にリユーグは左手を横に伸

ばして、徐に虚空を掴む——と同時に、リユーグの身体が再び空中へと引つ張り上げられ、寸前までリユーグがいた虚空を、竜の牙が空しく喰らう。

「ナイスヘルプ！」

思わず称賛の叫びを上げながら、リユーグは？んだそれを見てにやりと笑った。

リユーグが？んだのは、ヒュンケルが全身全霊を持って投擲した《貫く王の雷槍》だった。音速をも貫くほどの速度で投擲されたヒュンケルの《貫く王の雷槍》。先程名を呼ばれたのは、これを？めということだったのだろう。

しかし言葉通り《貫く王の雷槍》の投擲はそれだけで稲妻と同等の速度——即ち光速にすら届くと比喻される槍を？むことが出来たのは僥倖と言わざるを得ないだろう。

当然ながら槍の投擲速度が尋常ではない分、リユーグが？んだ程度では失速すらしなない 貫く王の雷槍 はリユーグの身体をそのまま宙空へと持ち上げ、リビアサレム・ドラゴンの牙から脱出する手段へと早変わりしたのだが、もし？み損ねていたら絶賛竜の牙に貫かれているのかと想像するとぞつとしない話だった。

が、今はそんな与太話を想像している暇もない。

リユーグは《貫く王の雷槍》に引つ張り上げられながらアイテムウィンドウを開き、そこから即座に変わりの剣を取り出して具現させる。

取り出された剣は無数の微細なポリゴンを従えて具現。リユーグの手に、装飾の省かれた無骨な直剣が収まる。

片手剣Bランク《武剣・ハイランダー》。ひたすら戦闘用に作られた、敵を屠るためだけの無慈悲な刃。

リユーグの今持つ剣の中で高い耐久度とクリティカル率を十%上昇させる効果を持つ剣が右手に納めると同時に《貫く王の雷槍》から手を放し、竜の頭上にまで上がった身体が虚空に投げ出され、再び自由落下に入る。

即座に竜の視線が中のリユーグを追う。リユーグとリビアサレム・ドラゴンの視線が交錯し、リユーグが剣を構え、リビアサレム・ドラゴンがその背に生える二つの翼を大きく広げる。飛び上がる気か、あるいは羽ばたきによる衝撃波攻撃か。

どちらにしろ、空中では大した対応はできないし、それはリユーグの仕事ではなく――

「空に逃げるか、あるいは風を起こすかは知らんが――させんよ」

宣告。それと同時にヒュンケルは両手に握る《討狼の銀銃》と《竜牙の黒銃》を構え、無造作に、無感動に銃爪を引く。

一切の容赦もなく、微塵の遠慮もせずに、両銃に装填された全弾クイックドロウを一斉掃射する。

無数の銃弾が竜の翼を撃ち抜き、広げられた翼に無数の穴が開く。リビアサレム・ドラゴンが翼を穿たれた痛み^にに嘶き、蓄積された敵意がリビアサレム・ドラゴンの視線をリユーグからヒュンケルへと移行させる。

自分に向けられる威圧的殺意と、今にも襲いかからんとする竜の敵意を向けられながら、ヒュンケルは僅かに口角を上げ、リビアサレム・ドラゴンを嘲笑うように両手の銃を送還し、アイテムウインドウから新たなアイテムを召喚――具現させる。

翳す左手に具現したのは、手のひらに収まる大きさをした、紫の光を発する刻印が施された黒球。右手には漆黒の闇に染められたような、リボルバーの形をした大口径の銃。

「お前は運がいいな、蜥蜴」

黒銃を水平に構えながら、ヒュンケルはうつすらと笑いながら左手の黒球を掲げながら、静かに「解放」と呟く。

「なんせ、一度に二つもの伝説級武具を相手にできる事態など、そうそうないぞ。だから——ありがたく受け取るがいい！」

黒球が纏う淡い紫光が力を増し、妖しげな輝きを放ちその形が液状に崩れていく。液状と化した黒球は虚空をたゆたい、ヒュンケルの黒銃を包みこむように幾重もの円陣を描いていく。形を成した円陣に描かれる幾何学模様——それは強大な魔術術式が明滅する。

——伝説級武具《魔眼穿つ砲銃》^{タスラム}。

ヒュンケルの持つ、もう一つの伝説級武具。巨大なる魔神の魔眼を貫いた、光の神が用いた弾。その名を冠するのが《魔眼穿つ砲銃》。武器分類は銃と銃弾の二つ。黒い銃と黒球、二つ一組の伝説級武具だ。

消耗品扱いである銃弾の中で、唯一所持数が減少することがない弾丸は、使用数制限がない代わりに膨大な量のMPを対価に使用することができる。一発につき最大MPの三割を以て討ち放たれる魔弾を、ヒュンケルは撃ち放つための銃を構えて標的を見定める。

《貴く王の雷槍》とは違い、《魔眼穿つ砲銃》には追尾性能がないため、こればかりはヒュンケルの腕前を以て敵を狙う必要がある。残りMPは最大の四割弱。MPポーションを使用するには術技後硬直時間^{リキヤスト}がかかり過ぎる。硬直が解けるよりも早く、リビアサレム・ドラゴンは被ダメージ硬直から解放され、硬直で動けぬヒュンケルを容赦なく蹂躪するだろう。

そうなれば宙空にいるリユーグは生き延びたとしても、ヒュンケルの必死は免れないだろう。それだけはあつてはならない。

だが、ヒュンケルの手に握られている銃は、このファンタズマゴリアに取り込まれた日から扱い続けてきた得物。すでにシステムアシストによる狙撃補正に頼る必要もなく、ただの目測だけで《距離》を把握し、五感で《風や重力》の影響を計測し、その上で標的に弾丸を叩きこめる自身が、ヒュンケルにはあった。

（……何より外すわけにはいかない。生き延びるためには、次の手で決めなくては――）

リビアサレム・ドラゴンのHPは最早残り僅か。要はどちらが先に攻撃に転ずれるか。ただそれだけの違いで生死が分かれる。

それと同時に、このクエストはクエスト受託者であるリユーグがリビアサレム・ドラゴンを倒さなければいけない。

だから自分がとどめを刺すわけにはいかない。

たとえ止めを刺せる状況であつたとしても。止めを刺さねばこちらが死ぬ状況であつたとしても――だ。

そして何よりも、ヒュンケルはもう一度見てみたいのだ。

かつてこの　ファンタズマゴリア　がゲームであつた頃、リユーグとヒュンケルの二人が挑み価値をもぎ取つたあの時の快感と、リユーグがああ剣を手に入れる――その姿を。

（自分の目で、あの光景を生で拝めるのなら――）

そのためだけに、このクエスト挑戦に協力することを快諾した。
親友でなければ、こんなS級モンスター討伐クエストに二人で挑むなどという馬鹿げたことに手を貸すことはない。

（――故に！）

あの場所にリビアサレム・ドラゴンを拘束する。リユーグが頭上にいるあの場所から、彼の竜を一步たりとも微動だとさせない。そして、それは並の銃でも魔術でも叶わない。かと言って、防御貫通と高クリティカル率を誇る《貫く王の雷槍》では倒してしまいかねない。

結果、ヒュンケルが導き出した答えを可能とするのが《魔眼穿つ砲銃》。高圧縮のエネルギー弾を打ち出す《魔眼穿つ砲銃》は、撃ち出した銃弾による《直撃ダメージ》の他に、地形着弾による《余波ダメージ》というものが存在する。

本来イベントなどで城や防衛地に設置されている大砲などに多く設定されているもので、大砲が撃ち出した砲弾が地面に着地した際に生じる爆発によって発生するダメージ判定だが、《魔眼穿つ砲銃

『の撃ち出す高圧縮エネルギー弾も、標的以外に命中した際に生じる爆発で、それと同じ判定が生じるように設定されている。』

これにより、『魔眼穿つ砲銃』はエネルギー弾を標的に直接ぶつける単体攻撃と、標的付近の地形に着弾させることでその周囲にダメージを拡散させる範囲攻撃を行うことができる。

（狙うは足元、竜の正面四メートル——！）

狙いを定め、ヒュンケルは銃爪を引いた。同瞬、ヒュンケルの手にする黒銃を覆う巨大な円陣の輝きが最高に達する。暗色の輝きが膨張し、次いで一気に集束。そのすべてが黒銃の銃口に集い、黒球と同サイズの光球と化し、一瞬の静寂を置いて——それは轟音と共に解放された。

紫の光は一条の閃光と化し、撃ち放たれた次の瞬間には、その光の先はリビアサレム・ドラゴンの足元に着弾し巨大な爆発を起こしてその内蔵エネルギーを爆散させる。

闇色の極光が炸裂し、エネルギーは衝撃波と化してすぐ目の前にいた竜を直撃した。目の前で起きた爆発と、それによって生じた衝撃波の影響を受け、竜の身体は再び傾ぐ。

『魔眼穿つ砲銃』の『余波ダメージ』を受け、リビアサレム・ドラゴンのHPバーがわずかに減少する。被ダメージ硬直が僅かに発生。竜の身体はその場で停滞し、それを確認したヒュンケルは術技後硬直時間に晒されながらリビアサレム・ドラゴンの頭頂にまっすぐ降りてくるリユーグに向けて叫ぶ。

「今度こそ決める！」

ヒュンケルの声が耳朵を叩く。彼の叫んだ言葉の真意を、リユーグはしっかりと理解しながら手にする剣に力を込めた。

おそらく、これがリユーグとヒュンケルの二人が生存したまま勝利することの出来るであろう、正真正銘のラストチャンス。この機

を逃せば、良くてリユーグかヒュンケル、どちらかが死亡、最悪二人揃ってご臨終という事態も想像に難くない。

それほどまでに竜系モンスターは、ひいてはリビアサレム・ドラゴン^グは強い。戦闘を開始して優に数十分が経過している中、ほとんど無傷で済んでいるのは奇跡と言っているだろう。

奇しくも此処がゲーム時代の ファンタズマゴリア 画面の向こうの世界 のような、

死んでも経験値ペナルティと所持品と所持金の損失という代償を払えば復活する——という概念が失せた今の状況が、ゲーム時代のリユーグやヒュンケルよりも、今の ファンタズマゴリア の日口理^グ宇と吾妻向吾^{ヒュンケル}のほうが一回りも二回りも強くなったという結果が成せる、死にたくないという意志と、その意志を成し遂げるためにひたすら修練を積み続けたという努力が生み出した奇跡故のことだった。

しかしその結果が生み出した恩恵ももう打ち止めだろう。ヒュンケルは《魔眼穿つ砲銃》を使ったことによる術後硬直状態にある。

《魔眼穿つ砲銃》の使用による術技後硬直時間は優に十秒弱。それだけの時間敵の目の前で無防備な状態でいたら集中攻撃の良的だ。そしてリユーグもまた、多技の連発による大量のMP消費に、対竜系モンスター^{アドバンテージ}戦闘の圧倒的な優位性を保証する《対竜兵装》を失っているし、すでに回復ポーションは指で数える程度。これ以上の戦闘継続はほぼ不可能な状態だ。

だからこそ、この一撃で終わらせなければいけない。このクエストは限定クエストであり、この機を逃したら二度と受託することが出来ないかもしれないし、他の誰かによってクリアされるかもしれない。それだけは何としても避けなければいけなかった。

今の日口理^{リユーグ}宇が、かつてのリユーグに並ぶには、このクエストクリアが必須なのだから。

目前に迫るリビアサレム・ドラゴンの頭部。そこに目掛けて導かれるように落下するリユーグは、手に握る《武剣・ハイランダー》を構えて、決して外すまいと意識を集中し——タイミングを見計ら

ってアーツ・スキルを選択。

片手剣奥義アーツ・スキル《メルフォース・ドライブ》。

全MPを消費して攻撃する片手剣の奥義が一つ。消費するMPが多ければ多いほど、その威力を始め、必中率の最低数値やクリティカル率を上昇させる単発剣技が、リビアサレム・ドラゴンに向けて放たれる。

リユーグの残ったMPすべてを注ぎ込んだ《メルフォース・ドライブ》が発動し、剣身全体が赤い光を立ち昇らせ、猛々しい闘気を纏った剣が大上段から渾身の力で振り下ろす。

「うおおおおおおおああ！」

咆哮と共に、赤光に包まれた剣が竜の頭頂を強打した刹那——目が眩むほどの輝きと衝撃が炸裂し、剣を包んでいた光が斬りつけた頭から天に立ち上るように解放される。

それと同時にリビアサレム・ドラゴンが全身を大きく振り回して悶え苦しみ出し、思わず耳を塞いでしまいたくなるような絶叫を上げた。

「うわっ!？」

あまりの揺れに、リユーグは体勢を崩してリビアサレム・ドラゴンの上から空中に投げ出される。視界が反転し、天地が逆さまになる中——リユーグはそれを見て竜の悶絶の意味を理解する。

HPバーが——そこに記されていた数値がゼロになっている。その意味をしつかりと脳が理解するのに数秒の時間を要し——理解しきった刹那、リユーグは着地の態勢を取るのも忘れてぐっと剣の握っていない左手で握り拳を作った。

それとほぼ同時に、絶叫したリビアサレム・ドラゴンの動きが急静止し、一瞬のタイムラグの後爆散——大量のポリゴンとなり、微細なライトエフィクトを周囲にまき散らしてその姿を徐々に霧散させていく。

その様子に、リユーグはいよいよ感極まって歓喜の叫びを上げようと大きく息を吸い込み、

「おい！？ 着地——」

というヒュンケルの声が聞こえたのとほとんど同時、リユーグは頭から地面に垂直落下を決め、

「うぎゃ!？」

情けない悲鳴をその口から漏らしてしまい——S級竜系モンスターを討伐した勇者の威厳は形を成すよりも前に瓦解した。

「いたたたた……」

「なんとも格好の付かない締めくくりだったな」

頭を抑えて未だ痛みが残る頭をさするリユーグに、ヒュンケルは普段気難し気に歪めた洪面を僅かに綻ばせてそう茶化した。

「そう思うんなら、もっと早く言ってくればよかったじゃないか」
むっと表情を顰めるリユーグの言葉に、ヒュンケルは聞こえないというそぶりで頭を振った後、

「此処が異世界で、更にステータス補正という恩恵のある世界でよかったな。もし此処が現実の世界であつたのなら、あの高さ、あの速度で頭から落下した場合、助かる見込みはそれこそゼロだっただろう」

「慰めになつてない言葉をありがとう、親友——さて」

ヒュンケルの冷ややかな応酬におざなりな返答をしつつ、リユーグは徐に立ち上がって、地面に横たわっているソレに歩み寄った。そして瞬時にアイテムウィンドウを開き、そこに納まっているイベントアイテムを顕現させて手に取った。

「あとは、こいつをこの頭に突きたてれば終了だ」

リユーグの手に握られているのは、一振りの剣だった。穢れを知らない、一切の装飾が施されていない純白の剣身を持つ、刃長七〇

センチ程度の剣。武器分類するのなら片手剣、と言ったところだろう。

それを握り、リユーグは目の前に堂々と横たわったオブジェ——先ほどまで戦っていた、リビアサレム・ドラゴンの頭部を一瞥し、「よつと」という掛け声と共に軽く跳躍——その竜の頭の上に音もなく着地して、僅かに視線をヒュンケルへと向け、

「——やるぞ……」

「——ああ……」

わずかに一言、そう交わし合う。

リユーグは竜の頭の上で静かに剣を逆手に持ち変える。

ヒュンケルは、ただ黙ってその様子を下から見守っていた。

二人を無音の静寂が包むこと、数秒。

「——……はあ……ああっ！」

わずかな呼吸の後、リユーグは気迫と共に手にした剣をリビアサレム・ドラゴンの頭へと突き立てた。

ザクリッ……

音と共に、リユーグの握る剣が根元まで深々と突き刺さり——次の瞬間、剣を突き立てた場所から大量の血飛沫が噴き出した。

常人ならばそのあまりの量に驚いて退くだろう——しかし二人は微動だにせず、リユーグは剣を突き立てたままもろに血飛沫を全身に浴び、ヒュンケルは噴出の勢いを失って雨のように降り頻る血飛沫にその白髪を濡らして赤く染め上げる。

何処からか、獣の遠吠えのような声が聞こえた気がした……

噴水のように噴出し続けていた血飛沫が徐々に勢いを失っていく。それでも二人は微塵も動こうとせず、ただ突き立てた剣を、それを濡らす血飛沫を見据え続けていた。

そしてついに血が吹き終えたのだろう。流れる気配すら失せた血潮の代わりに、突き立てた純白の剣が淡い光を発し——リユーグはそれを待っていたといわんばかりに突き立てた剣を勢いよく引き抜いた。

ぶしゅ……と、わずかに血が噴き出すが、そんなことなど気にならないのだろう。剣を引き抜いたリユーグも、その様子を見守っていたヒュンケルも、その表情に確かな満足の色を讃えていた。

リユーグの天へ向けて掲げられた右手に握られているのは、先ほど突き立てた純白の剣とは似ても似つかない、何処か禍々しく、同時に何処か神々しい気配を纏う、無骨な装飾の施された、白銀の剣身に血の色に染まったような刃を持つ一振りの剣があった。

それと同時に、リユーグとヒュンケルの意識上のシステムウィンドウに『クエスト【聖人の屠竜】をクリア。プレイヤー：リユーグが《竜血に染まる法剣》^{アスカロン}を入手』というシステムメッセージが表示され、二人は恐る恐ると言った様子でお互いの目を見——そして次の瞬間飛び上がりと言わばかりの歓声を上げた。実際、リユーグに至っては思い切り飛び上がっている。

「いいいいいいいよしゃあああああああああああああ！ 伝説級武器《竜血に染まる法剣》ゲットオオオオオオオッ！」

「ふう……これで当初の目的は達成というわけだな！」
剣を手にしたままリユーグは地面に降り立ち、空いている側の手でヒュンケルとハイタッチを交わす。

全身を竜の血に染め上げた男二人が揚々と騒ぐその様子は酷く凄惨なものに見えるが、今の二人には大した問題ではなかった。

今二人にとって重要なのはたった一つ。

《貫く王の雷槍》。

《魔眼穿つ砲銃》。

そして《竜血に染まる法剣》。

この三つの入手を、リユージュとヒュンケルが成し遂げたという事実。

まだ ファンタズマゴリア がゲームであつた頃、二人がそれぞれ手にしていた伝説級武具をついに取り戻したという、かつての——ゲーム時代のリユージュとヒュンケルに追いついたという、その現実のみが、今の二人にとって大切なことだつた。

「よっしゃあ！ 今日食うう！ ヒューゴ、飯食いに行こう！

クエスト報酬でガルドもたんまりだし、思いつきり贅沢と行こう！」

「馬鹿が。こういう時こそ、今後のことを考えてためておくものだろう。お前の浪費癖は前から並みならぬ者があると思つていた。丁度いい機会だ、リウ。お前にも金のありがたみというものを——」

「そういう話は帰つてからにしよう！ 今は伝説級武具三種の入手達成を祝してドンチャン騒ぐことだけを考えるんだ！」

「人の話を聞かんか、この馬鹿リウ！」

「後で聞いてあげるつていてるだろう！ さあ凱旋だ！ 今日という日に乾杯しよう、親友！」

「だから人の話を——」

そんな掛け合いをひたすらに繰り返しながら、二人は壮絶な戦いを繰り広げたリビアサレム山脈から、意気揚々と下山して行くのだつた。

リビアサレム山脈のドラゴンが、たつた二人の冒険者の手によつて討伐されたという話は古都ユングフィを瞬く間に駆け巡り、またそれを成し遂げたのがリユージュとヒュンケルという名を持つ者たちだという事実^{ヒンター}に、ファンタズマゴリア に取り込まれたプレイヤーたち——《来訪者》の間を震撼させたのは、それから数日の後の話だつた。

ファンタズマゴリアのプレイヤーたちが、自身のPCとなつてこの世界に取り込まれてから優に一年が過ぎた今日日、誰もが元の世界に返れないという絶望の最中で、ささやかに待ち望んでいた状況の変化。

そして《来訪者》の誰もが、実しやかに囁き続ける。

——《十二音律》の再始動……リユーグとヒュンケルが動き出した、と。

A c t 1：聖人の屠竜（後書き）

誤字などがありましたらご一報ください。『A c t 2：《来訪者》』
は大学の学祭用長編が書き終わり次第執筆。今月内を目途に製作し
ます。

A c t 2：〈来訪者〉

ヒュン、ヒュン——と、一定の間隔で剣が空を切り払い、風切音を残して幾つもの軌跡を描く。

朝の日がまだ昇って間もない時刻。大樹の乱立する森の中——木漏れ日の下でリユーグは剣を振っていた。

それはまだリユーグが理宇であつた頃からの習慣。祖父に叩き込まれた剣術の基礎の動きを徹底して繰り返す。朝露の中で、リユーグは金色の片手剣を右に振り、上から降り下ろしてを繰り返す。身体を縦横に動かし、剣が金の軌跡を生む。

速く、鋭い剣閃が風を唸らせてもいいだろうに、リユーグの周りは酷く静かだった。

波一つ立たない水面のように。

同時に、嵐の中でも眩さを失わない稲光のように。

白銀のコートを翻しながらリユーグの振るう剣の動作は、完成された静寂さと苛烈さを孕んでいた。

日々培った剣の技は、たとえどんな状況下におかれても身体が覚えていて。あとはそれをこの世界のリユーグの身体でひたすら反復練習させ、現実のそれと統合させる。現実リアルと虚構ゲームの入り混じったこのファンタズマゴリアで、リユーグは日口理宇として習熟し続けた現実の技を、一年かけてようやく実現させるに至った。

無論、この世界で剣術の動きがどれほど意味を成すのかと問われれば、おそらく意味はないに等しいのだろう。

結局はM O R P G ファンタズマゴリア という異世界——剣を振り、それを相手に命中させさえすれば、あとはシステムが勝手に自分のステータス+装備武器の攻撃力と、相手のステータス+相手の物理防御力から演算・算出してダメージを割り出す。

今や異世界と化した ファンタズマゴリア において、システム——というものの自体がすでに曖昧な存在と化しているが、それは考

えるだけ無駄というものだ。

剣を振って相手を切る——という一連の動作をする理宇^{リユーグ}にとって、ステータス値に圧倒的開きがあれば、たとえ相手を切ってもダメージにならないという概念は非常に不可解な現象にも感じられてならない。

「……本当に、リアルとゲームの境界線が曖昧だよなあ」

呟くと共に、リユーグは手にする片手長剣を引き寄せ、同時に地面を強く蹴った。

震脚——強烈な踏み込みによって地面が炸裂し、リユーグの身体が矢の如く前方に飛び出す。

一步の踏み込みで数メートルを飛び、空中を疾走しながら姿勢を正す。跳躍の勢いのまま、右足が地を着くのに合わせて剣を振り抜く。

「ふっ！」

呼気と共に渾身の刺突が放たれ、リユーグの前に佇立した大樹を鋼鉄の刃が貫いた。見物がいたら、それこそ剣はなんの抵抗もなく——豆腐に突き刺したかのような流麗さで大樹を貫いたように見えただろう。

実際、リユーグ自身も剣の握りを通して感じた抵抗はほんの僅かだった。元々の身体能力にステータス補正という恩恵を受けた臂力の前では、大樹も薄紙とほぼ大差のない障害物だ。

突き放った剣をそっと引くと、剣は大した抵抗もなく大樹から抜けた。リユーグはそれを手にしたまま二、三度素振りした後、剣身を眺める。そうして刃毀れがないかを確認し、剣の状態を把握すると何事もなかったかのように一息つき、剣を左腰に吊ってある鞘に納めた。

その作業を終えると、リユーグはその場で大きく背伸びをし、内に溜まったものを吐き出すように嘆息一つ。意識下でステータスウインドウを開き、時間を確認。表示されたアナログの数字が、もうすぐ朝の六時に差しかかろうとしている。

今日の練習はここまで——そう胸中でばやくと、リユージュはコートの裾を翻してその場を後にする。

その後ろの腰には、先ほどまでリユージュが振るっていた片手剣とはまた異なる、無骨に見えて何処か意匠の凝らされた鍔飾りを備えた片手長剣が吊るされている。

誰が見ても、その剣の貴重度^{レアリティ}が高いことは丸分かりだ。当然ながら、リユージュもその剣の価値を知っている——というか、誰よりもその剣の希少性を理解している。

普通のプレイヤーなら、貴重度の高低差に関わらず、装備武器はたとえ装備していたとしても視覚物体化せず、戦闘時のみの具現化するのが常識中の常識。貴重度の高い武器は不用意に注目を集め、場合によっては《PK》——プレイヤー殺^{キル}人の標的対象となることも少なくない。それはゲームであつた頃から変わらない。

いや、むしろ——

……ガサッ

その音を聞いた瞬間、リユージュは足を止めて音のした方に視線だけを向け、呆れたように肩を竦めて溜息一つ。

「いい加減、出てきたらどうだ？ 城門近くから尾行^{つひ}てるのは知ってる」

それはハツタリ（ブラフ）でもなんでもなく、事実だ。と言つても、別に気配を感じ取ったりしたわけではない。やろうと思えばやれないことはないだろうが、今回ばかりはその必要性すら皆無だった。

ファンタズマゴリア には《隠蔽^{ハインディング}》スキルというものが存在する。

隠蔽とは簡潔に説明すると、プレイヤーの視界からカーソルを消し、モンスターからはターゲットされなくなるというスキル。

追跡やダンジョンの長時間探索の際に重宝される《隠蔽》スキルは、ほぼすべてのプレイヤーが保持していたスキルの一つである。

が、これとはまた逆に《索敵》^{サーチング}スキルというものが存在する。索敵はその名の通り、隠れているプレイヤーやモンスターなどをミニマップに表示することができるようになるスキルだ。

リユージュのようなソロにとって、《隠蔽》・《索敵》どちらも単身行動する際には不可欠なスキルであり、リユージュは一人で行動する際は定期的に索敵を行うようにしている。仲間の援護も何もない状況では、周囲の状況把握が生死を分かつ。故にリユージュはたとえ朝の何気ない練習の時間ですら索敵することを忘れない。

そのため、ユングファイを出てそう時間もたないうちに、自分をつけているプレイヤーのカーソルにはとづくに気づいていた。が、相手をするのも正直面倒だったので、この瞬間まで放置していたのだった。

「そのまま黙って見学するだけなら、手を出さないつもりでいたけど……得物抜かれてまで見逃してやるほど、僕は甘くはない……」

極限まで感情の押し殺された平坦な声で、リユージュは冷徹にそう断じた。決して脅してではない。偽りない殺気を乗せ、リユージュは後ろ腰に帯びた剣の柄に手を添え、その相貌をすつと細める。

ミニマップに表示されているカーソルが動く。草木を掻きわける音と共に隠蔽ボーナスの高い黒や迷彩柄の外套に全身を包んだ集団が姿を現す。

手にはそれぞれ片手剣、曲刀、手斧を持った前衛の三人と、その背後に魔道書を抱えた二人と、杖を手にした者が一人現れる。前者が魔術攻撃特化の魔術師、^{ウォーロック}後者が回復を担う僧侶^{プリースト}だろう。

一対六。数の上では圧倒的な不利な状況であるにも拘らず、リユージュは姿を見せた六人を一瞥して、呆れた様子で溜息を洩らした。そして肩を竦め、剣の柄に添えていた手を放してやれやれと言った

様子で両手を広げる。

「まったく……喧嘩売るなら相手との実力差くらい把握してほしいものだね」

一見ただけで、リユージュは自身と相手の間にある力量差^{レベル}を把握した。ファンタズマゴリアにはあらゆるRPGに存在するキャラクターの強さを象徴化する数値——レベルというものが存在しない。

このファンタズマゴリアというMMORPGでステータスを上昇させるには、そのステータスが関連する行動をひたすら繰り返して熟練度を上げていくしかない。

HP・STR・VIT・AGL——以上四つのステータス値はすべて肉体活動——即ち戦闘や徒歩による移動によって経験値が得て成長する。

そしてMPとINTとRSTは、魔術などを代表とした精神集中系統の行動をすれば大きく成長する。

完全な熟練度制——とまではいかないが、ファンタズマゴリアではそうして上げていったステータス数値の高さの合計値でその強さが決まる——というのが定説とされている。

だが、それはPCの強さの基準を表すもので、プレイヤーの技量などでその強さは随分と強弱の差が生じる。

——無論、それはこのファンタズマゴリアがゲームであった頃の話だ。

今はコントローラーを操作してPCを動かすのではなく、プレイヤーが自らの意思で身体を動かしている。純粋なプレイヤーの身体技能がそのままPCの戦闘動作に直結する。コントローラーを用いた操作の上手さなど、現状のファンタズマゴリアでは微塵も意味を成さない。

必要なのはどれだけプレイヤー^{キャラクター}がPCを戦闘で上手く操作できる

かではない。どれだけ自分^{プレイヤー}が戦闘で上手く立ち回れるか——その一点に尽きる。それは現実でどれだけ実戦経験を培っているか、という問題にもなるが、それは些細な問題だ。

何故なら、現状の ファンタズマゴリア で実戦経験を持たない人間は、そもそも古都ユングフィの外に赴くことはない。

多かれ少なかれ、プレイヤーたちは皆自身のPCの姿になってから幾度か都市の外に赴き、その手で武器を手に取り、最低クラスのモンスターと相対しているはずなのだ。

——そしてそれが最初の関門。

ゲームであつた頃ならば何の臆することもなく、攻撃ボタンを押せばPCが勝手に動いて標的^{ターゲット}指定したモンスターを攻撃し、三丁四回攻撃を命中させれば難なく倒せたはずの、MMORPG ファンタズマゴリア 初プレイ時の練習台。

^{クラス} G級獣人系モンスターのコボルト。

G級子鬼系モンスターのゴブリン。

そしてG級不定形系モンスターのスライム。

そのゲーム時代最弱と分類された三種のモンスターと相見えて、この世界へPCとして迷い込んだプレイヤーたちが陥る結果は二つ。

——奮闘か。

——恐怖か。

二択に一つの結果が、プレイヤーにもたらされる。

初戦でエンカウトしたのがスライムだった者は幸運だっただろう。だが、コボルトやゴブリンと言った、肉の身体を持ち、臓器を内に宿したモンスターが相手だった者は災難この上ない結果だったに違いない。

現実社会において、人が一般的に手にすることがある刃物など、調理の際の包丁か、工作の際のカッターや鋸が関の山だ。

無骨な直剣など手にしたことすら始めてであろう人間が、それを手にしてモンスターと対峙し、慣れない中でがむしゃらに剣を振り回し——そしてコボルトやゴブリンの肉体を切り裂いた瞬間の感触に、我を忘れぬはずがないのだ。

剣の刃を、そして柄を通して伝わる肉を切り、骨を断つ感触。そして切り口から噴き出す血潮と、零れ落ちる臓物を見て、平然としていられる人間は少ない。

たとえ今いる世界が ファンタズマゴリア というゲームの中なのだとしても、倒したモンスターが絶命の数秒後に微細なポリゴンの塵となり、ライトエフィクトをまき散らして消え去ったとしても、命を屠ったという現実が目の前で起きた瞬間、多くのプレイヤーは愕然としてその場に膝をつき、意の内蔵物をその場で嘔吐した。

そうした現象を目の当たりにして、一年前のあの日、古都ユングフィに召喚された数万単位のプレイヤーたちの半分以上——多く見積もっても七割以上のプレイヤーたちが、都市の空き家や廃屋などに引き籠ったのだとしても、誰も彼らを責め苛むことはできないだろう。

あれだけの現象を目の当たりにし、体感して、更にはHPがゼロになると死ぬという可能性が浮上してもなお、それでもフィールドに出ることを諦めなかったプレイヤーたちのほうは、その後もモンスターと戦い、冒険者ギルドなどから回ってくる依頼クエストを受託したり、あるいは未踏のダンジョンに挑んでゆく。

攻略組——そう呼ばれるようになった彼らは、日々のほとんどをファンタジマゴリア の探求に明け暮れていた。

その繰り返しその先に、元の現実世界リアルへ変える手段があると頑なに信じて……。

だが、そんな状況の中でも外道に堕ちる者は存在した。

突如陥った現状に絶望し、諦め、ユングフイに引きこもる者。

己の身の上を理解しながら、それでも尚奮起し現状を打破しようと奔走する者。

そして、そのどちらにも属さぬ者もいる。

それが、今リユージュの前に現れた面々だ。

—— P K。

多々存在する M M O R P G において、必ず存在し、忌み嫌われる者たち。モンスターではなく、プレイヤーを攻撃し、死に至らしめてその所持アイテムやガルドを奪う行為を行う。

他者を標的とし、淘汰し、蹂躪し、略奪し、そして——殺人^{キル}する存在^{プレイヤー・キラ}。それを愉悦として、享楽として行使する者たち。

P K。

P K という行為そのものは M M O R P G ファントズマゴリア

の運営側にて容認されている。ゲーム時代から、この手の手合は数多く存在していた。高レベルのプレイヤーの単身による低レベルプレイヤーを相手とした一般的な P K を始め、徒党を組んでの T P K などその手法は様々によって繰り広げられていた。

しかし、それはゲーム時代の話であり、ファントズマゴリア

という異世界に、自身の P C として存在を移転して以降も、この手の行為を平然とやる人間が存在する。

その結果が伴う意味を理解して、その上でなおその行為を甘んじて行う不逞の輩。現代社会では許されない《合法的殺人》——それに伴う略奪。法という秩序に縛られた社会から逸脱したこの ファントズマゴリア でならそれは可能となる。

未知の世界。不可解な現象によって送り込まれた見知らぬ大地。

非現実的現象の果てに辿り着いたこのゲーム^{ファントズマゴリア}の中の世界でならば、その行為を咎める法律などない。何をやっても現実の自分は法によ

って咎められない。罰せられない。そんな思想に駆られた者たちが至った結論は一つ。

——ならば奪おう。ならば、殺そう。

ゲームであつた頃からPK行為を行っていた者たちは、その狂気じみた思想に溺れ、現実における犯罪行為をさも当然のように行いだしたのだから、他のプレイヤーたちは対応に迫られた。

結局のところ、それぞれがその場で自己判断の下に対処する——という、当たり障りのない無難な回答が投げられたのだが、まったく難が無いわけがなく、今こうしてリユージュの目の前に彼らは立っている。

六人のPKを目前に、リユージュは酷く冷めた視線で彼らを睥睨した。誰も彼もが目深に外套のフードを被り、口元を布などで隠している——なんと典型的な物取りの姿。顔を隠すのは後ろめたいことがあるから、とよく言うが、なるほどその通りとリユージュは内心納得した。

（——僕を逃しても後々顔が割れて報復されないため……そんなところか）

だとしたら、それは何と甘い考えなのだろうか。そうリユージュは思う。

リユージュの脳裏に描かれたミニマップのカーソル。そこに表示されている彼ら六人のカーソルカラーは赤。

通常のプレイヤーの色は青で、NPCは青。モンスターは黒で表記される。

プレイヤーのカーソルが赤く染まる理由は一つ——PK行為をすで行っている証——即ち殺人行為に手を染めたプレイヤー、PKを表す色だ。

一人殺したのか十人殺したのかは分からない。だが徒党を組んで随分と周到的な対人装備で来ているところを見ると、PK行為が随分

と手慣れているように見える。

——つまりは、そういう連中だということだ。

リユーグは微かにせせら笑う六人を睥睨しながら、左腰に吊つてある剣の柄に右手を掛けて鞘走らせる。

ジャリン——という音と共に、金色の剣身を持った片手長剣が抜剣され、空を切った。木漏れ日に照らされた金色の剣身が僅かに眩い光の軌跡を描く。

リユーグはそれを体を開きながら片手正眼に構え、酷く冷淡な声音を装って告げる。

「自分より弱い者を殺して悦に浸るお前ら如きに、僕の首が取れるものならやってみせろ」

軽い挑発。だがそれだけで十分だとリユーグは確信している。

P Kにばかり、他者を踏みつけ、蔑み、嘲笑う者の大体は自尊心が高く、自分が格下と認識した相手になめられるのを極端に嫌う。

「——テメエ！」

「舐めやがって！」

案の定、リユーグの言葉を聞いたP Kたちは憤慨した様子で地を蹴った。前衛の三人がリユーグ目掛けて肉薄し、後方の三人が一斉に詠唱を開始する。

対するリユーグは、向かい来る三人を無視し、その間隙を縫うようにしてすり抜けて疾駆する。彼らの目には、リユーグがまるで消えたかのように見えていただろうが、これはなんてことのないすり足による足運びと体捌きによる最小限の動きを理解していればそれほど難しいことではない。

単純に、リユーグとP Kたちの間に生じる実力の差が如実に顕在化しているだけに過ぎない。

リユーグの瞬動に驚愕し目を剥く三人の前衛を抜けて、リユーグは後方で詠唱状態にあった三人の術者に迫った。脳裏に表示したス

キルウィンドウからスキルを選択。リユージュの剣が黄色のライトエフィクトに包まれ——リユージュはそれを隊列の最奥で粟を食ったように慌てふためく僧侶目掛けて上段から振り下ろす。

片手剣下位アーツ・スキル《スタンエッジ》。

状態異常の一つ麻痺を引き起こす、片手剣アーツ・スキルの状態異常効果を宿した剣技の一つ。

状態異常効果を宿すアーツ・スキルを行使した際の状態異常発生率は、発動側のDEXとLUCに対し、相手側のVITとRST、そしてLUCの数値が関係してくるが、この戦いにおいて、その数値にはあまりにも開きがあった。

リユージュもそれを確信した上で、対人戦闘にも関わらず《スタンエッジ》を行使する。黄色の輝きを纏った斬撃がPKを切り払う。
クリンヒット
的中。

リユージュの剣撃を受けた僧侶の身体が傾ぎ、その場で膝をついて蹲る。《スタンエッジ》による麻痺効果が顕現化し、僧侶の動きが止まった。

リユージュは剣を切り払った勢いのまま、膝をつく僧侶のすぐ傍で詠唱していた魔術師目掛け上段から斬り下ろす。

躊躇いも葛藤もない一刀両断。顔を隠していたフードや布も諸共に両断——僧侶の纏っていた外套の前面が中央から綺麗に真二つへと分かれたれ、パサリという乾いた音を立てて地面に落ち——その外套を纏っていた魔術師もまた、詠唱することも忘れて零れるほどに目を見開き、忘我した様子で地面に座り込む。

瞬時に無力化された二人の間間を見たもう一人の魔術師は咄嗟に詠唱を制止してその場からバックステップで飛び退き、リユージュとの距離を開こうとした——が、魔術師が飛び退いた分だけ、リユージュもまた魔術師へ向かって踏み込む。

彼我の距離は変わらず、結果魔術師はリユージュの間合いの内に囚われたままで、布越しに隠れた状態でも把握できる程度には顔を顰めているのを見つつ、リユージュは再びスキルウィンドウからスタ

ンエッジ を選択。

——斬撃一閃。

黄色のライトエフィクトが剣から迸り下段脇構えの状態からの右切り上げの剣閃が炸裂する。

刃が敵を捉える間際、リユージュはひょいと手首を捻って剣を操り、剣の腹の部分で魔術師の顎をかち上げた。

鈍い音と共に、魔術師の身体が宙空に打ち上げられる。

「——って、あれ？」

剣を通じて感じ取った手ごたえに、リユージュは思わずそんな間抜けな声を上げた。

渾身とは程遠い力で打ち上げたつもりだったが、予想以上に魔術師の身体が軽かったために、魔術師の身体は大きな放物線を描き、やがて重力の手に引かれて地面に落下し、生い茂る草木の向こうに消え去った。

思わず今が戦闘中であることも忘れ、リユージュは魔術師が茂みの向こうに消えて行った方向を見たまま硬直し、

「……えーと……わざとじゃないからなー」

思わずそんなことをのたまう始末である。

そんな緊張感の欠いたリユージュの背へ怒号が吐きつけられる。

「敵の心配するたー余裕じゃねーか！」

剣を手にしたPKが、そう叫びながら無防備なリユージュの背中に切りかかったのだ。

刹那、リユージュが舞う。剣が振り下ろされた瞬間、彼はほとんど

反射で動き、PKの剣閃を左に反転させながら躲す。そして回避の動作の勢いを利用して、考えるよりも先に右足を振り上げた。

剣士のブーツの爪先が、まるで吸い込まれたようにPKのこめかみを打ち抜く。STR補正のかかった蹴打は、それだけで致命傷になりうる。

実際、リユーグとPKの剣士との間に存在した力量差は倍近く存在し、蹴りの一撃だけでPKのHPの四分の三が削れていたが、それは当然ながらパーティを組んでいないリユーグには見えない。

が、見えていた残りのPKたちからすれば、仲間のHPの減り具合を見て呆然とするしかなかった。

いや、正直に言えば疾うに彼らにはリユーグと戦う気概が折れていた。

リユーグの蹴りで吹っ飛んでいく剣士を見ながら、槍使いと斧使いの戦士PKは愕然とその有様を眺めていることしか出来ず、同時に自分たちの愚かさを十二分に噛み締めてもいた。

先手を打って飛びかかったつもりが気づけば標的は視界から消えており、振り向いて見れば後衛の仲間——それも回復の要である僧侶がすでに無力化されている。

そのことを脳が理解して、ようやく対処に走ろうとしたその時には、すでに次の一手で二人いた魔術師の片方の闘争心をたった一刀で粉碎しているではないか。

多くのプレイヤーたちは、ゲームであった頃もPC化した今も、PKというのは恐怖の対象であるというのが彼らPKの共通認識であり、矜持でもあった。

さらに今は、HPがゼロになれば文字通り死んでしまうという先入観がある。

そしてPKとは多くのプレイヤーにとってモンスターよりも身近な死の象徴だ。

誰だって、死ぬのは怖い。それは人間ならば誰もが持っている極当たり前の恐怖心だ。

そしてこの ファンタズマゴリア において、それをプレイヤーたちに最も思い知らせることができるのは、自分たちPKだというのが、彼らの考えである。

PK（自分たち）に囲まれれば、誰もが竦み上がり、怖れ慄き、泣いて叫びながらみつともない命乞いをする。

その姿を見るのが、PK行為の最大の娯楽。

特にレベルが高く、強い装備を持って普段から偉そうにしている連中の喚く姿を見るのが酷く嗜虐心をそそられ、その瞬間は麻薬をキメたような劇的な悦楽を得られる——故にPK行為は止められない。

あのHPをゼロにして命を奪う瞬間がたまらなくて、彼らはPK行為を繰り返すのだ。

そんなことを繰り返し続けて半年余り。ある日、彼ら六人はとある噂を耳にして、ユングフィの外通門を見張っていた。

噂というのは酷く単純で陳腐なもので、『毎日朝早く、ある剣士が都市の外で一人稽古をしている』というものだ。

その剣士というのが相当名の知れたプレイヤーらしく、彼らはその剣士を標的にすることを決めた。

たとえ高レベルのプレイヤーであっても、一対六ともなれば敵うはずがないという考えに陥るだろう——そう思ったからこそ、多少の力量差という不安材料にも目を粒つての今回のPK。

わざわざ象徴化してまで装備している質素だが美麗さを漂わせる剣——誰が見ても相当の値打物だと分かるほどの持ち物に目がくらんだのが失敗だった。

最初は抵抗するだろうが、六人総出でかかればそのうち一方的な攻撃ができる——そう言ったのは僧侶——オリオンだったな——と、槍使いは何処か他人事のように思い出した。

その彼はというと、最初にリユージュの片手剣アーツ・スキル《ス

タンエッジ》によつて麻痺させられ、今も動けぬままにいるが……
多少の力量差——なんてものではない。圧倒的な力量差だった。
しかも素人目に見ても分かる、流麗立ち回り。

自分たちのような、ただ適当に武器を振り回したり、システムアシストに頼つての我武者羅な戦い方とは違う——れっきとした武術の動作。

洗練された剣士の動きというのはああいふものなのだろう。きっとステータスの数値も自分たちとは比べ物にならないくらい高い。自分たちのような下級——良くて中級程度の力量しかないPK如き、きっと百人束になつても勝てないだろう——そんなことを頭の片隅で考えていた。

PKは、確かにPKが不可能な安全地帯であるユングフィに常日頃から引きこもっている、ほとんど初期ステータスのままのプレイヤーからしてみれば絶対的恐怖の対象だろう。

彼らも、そんな自分たちよりも遥かに弱い奴らばかりをPKしていた。だからこそ忘れていた。

PKを恐れないプレイヤーはいくらでもいるということ。

目の前の剣士は、まさにそんなプレイヤーの一人だった。PKをキルするPKKとは違つたろうが、明らかに自分たちのような手合いには慣れているのが分かる。

しかも手加減されていた。

そう理解できるのは至極簡単——誰一人として死んでいないからだ。あれだけ圧倒的な力を持つているようなプレイヤーだ。その気になれば自分たちなど上位か、あるいは奥義アーツ・スキルを以てすれば瞬時に六人のHPをゼロに出来るだろう。

が、彼はあえてそれをせず、致命傷となる一撃を避けて各個撃破に努めている。

それだけの余裕が、この剣士にはあるのだ。

舐められている、なんてものではない。手玉に取られているとでもいえばいいのだろう。彼にとって自分たちPKなど齒牙にかけな

いような存在なのだ。

それを痛感させられる。

無慈悲で冷ややかな気配。圧倒的な存在感を見せつける剣士に、残った二人のPKはただただ茫然と彼を見ていた。

言葉なく、その悠然と佇む彼の立ち姿が物語っていた。彼は自分たちをキルこそしないが、その剣気が言葉の代わりとも言つうように威圧する。

——お前たちなど、その気になればいつでも殺せる………そう言われた気がしたのだ。

ごくろり……無意識につばを嚥下する。ほんの一分にも満たない時間の間に成された鎮圧劇に、二人は自分たちがどのような扱いを受けるのかを慮る。

先の四人のようになるのか、あるいは見せしめに自分たちだけキルされるのか——そう考えた矢先、剣士が振り返って二人を見た。何処か呆れたような、それでいてキョトンとした様子で自分たちを見る剣士の様子に、一体何を考えているのかその胸中を知るすべのない二人は思わず身を竦ませて硬直する。

「あー……その二人」

そんな彼らに、剣士は——リユージュはあっけらかんとした様子で朗らかに笑いながら言った。

「この四人をひっ連れて、今すぐ退散するならこれ以上手を出さない——って、言ったらどうする？」

二人はリユージュの言葉を聞き、それを理解するのに数秒の時間を要した。

そしてその言葉の意味を理解した瞬間、彼らはPKの矜持も捨てて、

「是非、退かせて下さい」

声を揃えて、彼の提案を承諾した。

もう、そこにあつたのは一般プレイヤーを恐怖に貶めるPK（殺人者）の姿ではなく、あるのはただ絶対的上位者に対して胡麻擦りをするような、せせこましい小悪党の頭を下げる姿だった。

仲間を抱え、全速力で立ち去っていくPKたちの背中を見送りながら、リユーグは嘆息しながら剣を鞘に納めた。

そしてPKたちが走り去って行った方向とは真逆——朝を迎えても鬱蒼と茂る木々の葉に遮られて光のまばらな森のほうに視線を向けて、若干呆れたように柳眉を下げて声をかける。

「のぞき見はあまりいい趣味とは言えないと、僕は思っただけど？」

「……何だ。気づいていたのか？」

「ああ」

帰ってきた問いに、リユーグは短く答える。

「可笑しいな。私の《隠蔽》スキルレベルは相当高い。幾ら君の《索敵》スキルが高くて、見つけるのは結構至難だと思っただが？」

「君の場合は気配で分かったよ。君とはもう何度も顔を合わせている。《隠蔽》スキルに頼り過ぎて、気配を隠すのを忘れているのはどうかと思うな？」

「ぬ……それは迂闊だったな」

木々の間から自責するような声が返ってくる。と同時に、草木を掻きわけて、その声の主は腰まで届く金色の髪を靡かせて堂々たる歩みで姿を現した。

姿を現したのは、癖のないまつすぐな金髪に翡翠色の瞳を持った麗人。純白の騎士服の上に、アーマープレート金属の胸当てにガントレット手甲などで武装したその女性。

ユーフィニア・メーベ。

ゲームであった頃の ファンタズマゴリア で、古都ユングフィを中心^{ルンナイト}に活動するギルド——『ガーディアン』のサブマスターを務める魔法剣士。

何処か優雅さすら感じさせる足運びでリューグの前に姿を現した彼女は、生真面目そうな表情を僅かに崩して微笑する。

「助けに入ろうか悩んだのだが、そうしているうちに事が済んでいたのだな。どうしようかと思っていたところだ」

「それは申し訳ないことをしたね。貴女の出番が来る前に舞台を終わらせてしまったみたいだ」

彼女の言に、リューグはほとほとあきれた様子で肩を竦めて微笑する。が、リューグは僅かにその穏やかそうな相貌を細めて、

「……それで、ユングフィの防衛隊長であるユーフィニア・メーベ殿はなぜこのような場所に？」

「皮肉か……性格の悪い奴め」

「なんのことだか？」

ユーフィニアの苦言を、リューグは微笑で受け流し、しらを切る。ユーフィニアが皮肉と指摘したのは、リューグが口にした『ユングフィの防衛隊長』という言葉。

それはユーフィニアの所属しているギルド『ガーディアン』に対して一般プレイヤーの多くが用いる皮肉の籠った別称だ。

一定の思想などを持ったプレイヤーたちが集まって構成される集団組織——ギルド。ユーフィニアの所属するギルド『ガーディアン』は、ファンタズマゴリア のサービスが開始されて間もない頃に結成され、新規参入プレイヤーのサポートを主目的として活動する、ファンタズマゴリア でも屈指の古参ギルドだ。

全てのプレイヤーたちのステータスを始めとしたあらゆるデータが初期化された後にも——即ち ファンタズマゴリア が異世界となった後も再び発足され、ユングフィ内部でくすぶる多くのプレイ

ヤーたちを支援団体に近い活動を取りながら、同時にユングファイ周辺の警戒をし、PK行為抑制を行っている——ユングファイを拠点とした一種の自警団ギルド。それが『ガーディアン』。一部のプレイヤーたちは皮肉を込めて、ユングファイの防衛隊などと揶揄している。リユーグはそのことを踏まえた上で、彼女のことを『防衛隊長』と皮肉ったのだ。

が、そこに対はなく、単なる言葉遊びとも言える。ユーフィニアもそれを理解しているらしく、言葉こそは不満を装っているが、その表情は怒りとはほど遠いものだった。

彼女は口角を上げて微笑んだまま、しかして残念そうに言った。

「無事だったのはいいいが……たまにはピンチに陥ってみたりしないのか？ そうすれば私も君に恩を売れるというのに」

「一応聞きますが、恩を売ってどうする気ですか？」

「ギルドへの勧誘だな」

リユーグの問いに、ユーフィニアはにっこりと笑って答えた。対して、リユーグは呆れた様子で肩を竦める。

「まだ、諦めてなかったのか？」

「当たり前だろう」

ユーフィニアは即応する。

「君ほどの高レベルのプレイヤーは何処のギルドだって喉から手が出るほど欲しがるさ。ギルドだけじゃあない。このファンタズマゴリアにある様々な国や都市の護りを担う責任者なら、君やヒュンケルのような、他の通髓を許さぬ実力者はどんな手段を労してでも得ようとする者は少なくないはずだ」

やたら雄弁に熱弁するユーフィニアに対し、リユーグは酷く冷めた態度で呆れたようにかぶりを振って見せた。

「随分と、僕やヒュンケルあいつのことを高評価して頂いているようですが、それは言い過ぎだと思えます」

「馬鹿なことを言うな！」

即座にこちらの弁は否定された。しかも鬼気迫る表情で——だ。

ぎよつと目を剥くリユーグに対し、ユーフィニアは有無を言わせぬという様子で、まくしたてるように言葉を連ねる。

「君たちは私たちの評価を過大と言うがな。ならば逆に問いたい！

まだ ファンタズマゴリア コンフィニョー がゲームであった当時も諸々が騒ぎ立てていたがな！ 生き返りもやり直しもないような現状——今や現実とほとんど違いのない異世界と言っても過言ではない、死んだらそれで終わりのこの ファンタズマゴリア で、何をどうすればあの超難関クエストである『聖人の屠竜』をたった二人だけで攻略 クリア出来るのか説明して見せる！」

それは無理です。

強いて言うなら、死に物狂いだっただけ。

リユーグは胸中の身で返答しながら視線を逸らす。実際、あのクエストの最中はリユーグもヒュンケルも本当に無我夢中でリビナサレム・ドラゴンと対峙していた。

一年近く前から入念という言葉が十はつくくらいの準備を重ね続け、ゲーム時代では不可能と言われたアーツ・スキル ドラゴン・キラー 画竜点睛 ドラグ・アーセファード を習得し、可能な限り性能の高い《対竜兵装》を用意して、ヒュンケルに至っては伝説級武具まで入手した上で——それでもギリギリの勝利だったのだ。

（正直、よく生き残れたものだ）

それは紛れもない、リユーグの本心。あれだけの強敵を、たった二人で挑むというのは無謀を通り越して無茶の極みであり、倒せたのは実際に奇跡に近かっただろう。

「まあ、運が良かったとしか言いようがない」

「——運、の一言で済ますな」

今にも掴みかかって来そうなほどの形相でリユーグを睨みつけるユーフィニアに、リユーグは言葉なく曖昧な笑みを返すに留めた。

「実際、あれは運が良かったのです。僕もヒュンケルも、そう感じていますから」

「まったく……多くのプレイヤーが聞いたら泣くことだろう。一時

期は君らが現状を打破してくれるのではと実しやかに囁かれたというのに」

一時期——それはリユークとヒュンケルの二人が、一回限定クエスト『聖人の屠竜』を攻略し、《竜血に染まる法剣》^{アスカロン}を入手してすぐの頃、ユングフィの内部で暗澹と暮らしていたプレイヤーたちに訪れた大きな変化だった。

この ファンタズマゴリア に取り込まれて一年近く——大きな変化もなく、情性で続く生活ばかりの引きこもりプレイヤー——通称《敗者》^{カセル}たちの耳に届いた噂。ゲーム時代、彼の至高存在集団《十二音律》に名を連ねていた二人のプレイヤーが、超難関クエストを制覇して伝説級武具を手にしたというのは電撃が走るような衝撃だったのだ。

——《十二音律》というのは、MMORPG ファンタズマゴリア において生ける伝説的存在だ。

かつてBBSに『ファンタズマゴリア 内で最強って誰?』という書き込みに対して上がった十二人の至高存在^{ハイ・レベルプレイヤー}の名前を纏めてその名付けた総称であり、いつの間にか ファンタズマゴリア プレイヤーたちの間で常用されるようになった。

ちなみに名の由来は音階であり、名の挙がった十二人のうち五人が漢字名、七人がカタカナ名であることから、漢字名のキャラを日本音楽の五音音階に、カタカナ名のキャラを西洋音楽の七音音階にたとえ、合わせて《十二音律》なのだという。

おそらくゲームである ファンタズマゴリア が和名だと 交響想歌 だというのに掛けているのだろーという憶測が飛び交ったが、その真意は定かではない。

その《十二音律》に名を連ねていた敗者が、伝説級武具を手に入れている——それは多くの《敗者》にとって光明に感じられたことだろう。

だが、その噂の後にこの ファンタズマゴリア に『プレイヤー
が取り込まれ、ログアウトすることが出来ない』という状況に変化
が訪れたことは、一度たりとなかった。

僅かにでも希望が差し込んだと思った《敗者》にとって、より強
い絶望を与える結果にしかならず、彼らは事あるごとに《十二音律
》や、積極的に活動している攻略組に対して罵詈雑言を叩きつける
ようになってしまったのだ。

そんな噂が飛び交い、その後の《敗者》たちの粗野な行動の発端
になった元凶と言える本人は、

「確かに、僕らは元の世界に——現実に戻りたいと考えていますし、
その方法を模索して、日々奔走をしています。ですが、だからと言
って他人任せな連中の期待に応えてやるほど、僕らはお人好しじゃ
あない……」

「うむ……」

リユーグの言葉に、ユーフィニアは押し黙る。ユーフィニアは、
リユーグが遠まわしに「文句があるなら自分で動け」と言っている
のが理解出来たのだ。そして、その言葉が正論である故に、返す言
葉が見つからない。

美麗な面持ちを、申し訳なさそうに眉を顰めているユーフィニア
に向けて、リユーグは苦笑した。

「君がいちいち気にすることじゃないだろう。君が気にしたところ
で、彼らの考えが変わるわけでもない」

「うむ。だが、私たちは彼らの安全を守る必要がある。それが私た
ちのような力のある者の勤めだろう？」

真顔で告げられたユーフィニアの言葉に、リユーグは僅かに目を
見開いた。そして失笑する。

「力ある者の……ね」

リユーグの呟きに、ユーフィニアは大仰に頷いて見せた。そして
誇るように胸を張って見せる。

「そうだ。私にしろ、お前にしろ、私たちは彼ら《敗者》に比べて

力を持っている。だから彼らの矢面に立って戦い護り、元の世界に戻る術を手にしなければならぬ。違うか？」

「……」

彼女の言に、リユーグは何を言うでもなくただ曖昧な笑みを浮かべるだけだった。しかし、彼女はそんなリユーグの様子に気づいていないのか、何処か喜々とした様子でリユーグに詰め寄った。

「だから、お前はその力を存分に振るうべきなんだ。大衆のために迷い、現状に嘆くしかない多くのプレイヤーのために。だから、そのためにお前はギルドに属するべき——」

「——そこまで」

頬を上気させるほど熱の入り出したユーフィニアの言葉に、リユーグは片手を突きだして一服をかけた。

「誘ってくれるのは嬉しいけど。僕はギルドに属する気は毛頭ないから。これは、以前から言っていることだろう？」

「だ、だけど——」

「それに」

ユーフィニアが何かを言おうとしたが、リユーグはそれを遮るように強く言い放つと、彼女は「うぐ……」と小さな呻きを漏らして言葉を呑み込んだ。

「僕は君のような『大衆のために』なんていう崇高な志は持ち合わせていない。それに、他の誰かに合わせて動かなければならないギルドは、自由勝手に動く僕には肌が合わないだろうしね」

リユーグはそう言って微笑する。その笑みは何処か自嘲するような雰囲気纏っていて、その表情を見たユーフィニアは、仕方がないという様子で溜息と共に脱力した。

「……まったく。そう言われたら、必死に勧誘している私は馬鹿ではないか」

「案外、外れてもいないと思うけど……」

「……それは挑戦と受け取っていいのだろうな」

ボソリと呟いたつもりだったのだが、それを聞き逃すようなユー

フィニアではなかったらしい。彼女は先ほどまでとは打って変わった鋭い視線をリユーグへ向け、腰に帯びている細剣レイピアへと手を伸ばしていた。鬼気宿るユーフィニアの様子に、リユーグは頬を引き攣らせ後退る。

（ああ……やっぱりこうなるのか）

過去、幾度となく言葉選びに失敗し、彼女の怒りの琴線に触れては勝負を挑まれているという自分の失態を嘆きながら、リユーグは今すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られ、そのタイミングを見計らう。

そんなリユーグに対し、ユーフィニアは細剣を抜剣しながら言う。

「丁度いい機会だ。リビアサレム・ドラゴンを倒したほどの腕前……

一度拝見してみたいと思っていたんだ」

「へ、へー……そうなんだ。でも、僕としてはできれば遠慮したい」

そう答えながら、リユーグはじりじりと間合いを詰めてくるユーフィニアから距離を取るが、取った分だけユーフィニアは迫り——そして細剣を突きつけた。

小気味よい風切り音と共に、細剣が閃いた。

「抜け、リユーグ・フランベルジュ！ その剣の腕前、此処で私に見せてみる！」

「そんなのは断るに決まってるだろう！」

閃く細剣の連舞を悉く躲しながら、リユーグは叫ぶ。

間隙を縫うように身を翻し、ユーフィニアの剣撃の間を見て間合いから逃れるや否や、リユーグは回れ右して一目散に走り出した。

「待て！ 逃げるな！ 男らしく剣を抜け！」

「訳が分からんよ！」

剣を振り回しながら追いかけてくるユーフィニアに対し、リユーグはそう講義の声を上げて振り向くこともせずに、全速力で古都ユングフィに向かって走り続けた。

——古都ユングファイ。

約五十年前までこの大陸で随一と言われるほどの栄華を極めたと云われる巨大な城——シアルフォスを中心に四方へ広がる広大な城下町を持つこの都は、他国から訪れる外国人の観光名所として、そして多くの冒険者の拠点として今もなお繁栄を失わない長い歳月の積み重なりから滲み出る、趣が溢れた憩いの地であり、MMORPG ファンタズマゴリア における、プレイヤーたちの冒険の始まりを祝福した出発地点——だった場所。

今では文字通りの生活を送る土地。

飯を喰らい、寝床を確保して夜には眠る場所。

ゲーム時代には考えられなかった様々な人間としての生活を繰り返し、装備を整えて各地に赴き、元の世界へと変える手段を探るための拠点と今はなっている。

この都市には現在だけで数万に及ぶプレイヤーたちが逗留している。その八割近くが《敗者》であり、多くは都市を覆う防壁近くの廃屋や長屋に住みこんでいる。彼らの姿を見ることは、攻略組にする、それに及ばないが日々自己鍛錬に切磋琢磨するプレイヤーにする、そんな《敗者》の姿を見ることは滅多にない。

この ファンタズマゴリア にある日突然、何の前触れもなく放りこまれたプレイヤーにとって、この地は異界。自分たちがこれまで暮らしていた生活圏とは全く異なる——見知らぬ地だ。

これまでの当たり前が一切通用しないような場所。文化も風習も違い、文明の利器もないような場所——剣と魔術が当たり前の世界にいきなり放り込まれ、文明社会に生きていた人間が即座にその状況に対応し、順応できる訳もない。

《敗者》はそういう人間の総称だ。

ただ、戦えないのではない。

ただ、動けないのではない。

ファンタズマゴリア は何もモンスターと戦うだけのMMORPG

Gではない。このゲームのコンセプトは、『もう一つの世界で、もう一つの人生を』。コピーそのものが、このゲームの主題だ。

戦闘以外にも、このゲームにはあらゆるファンタジー主体故に、中世ヨーロッパのような世界観を持っていることを除けば、現実に近い要素が組み込まれている。

素材を集めてそこから様々な物を作り上げる生産スキルは当たり前のこと、物資の流通や販売を賄う商業スキルを用いて、商會を立ち上げたりもできる。

他にも多種多様に存在する戦闘以外のスキルを用いれば、戦う以外にも様々な方法でファンタズマゴリアは参加活動できるのだ。レベルのない熟練度を高めたファンタズマゴリアなら、都市から一歩も出ることなくそう言った生産系スキルを習熟していけば、生活していくには事欠かない。

元々ファンタズマゴリアというゲームは、プログラムを組み立てて、ファンタズマゴリアにUPすることで新しい魔術開発が出来たり、リアルで創作した書籍物を公開することも、歌や演目などを披露することも、あらゆるMMOを凌駕した機能が存在していた。

もちろん、今でも一部のプレイヤーは精力的に活動して、事業を興したりすらする者もいる。

露店。

商會。

劇団。

出版社。

果てにはアイドル事務所まで。

まさになんでもござれの状態だ。

プレイヤーがPCとしてファンタズマゴリアに取り込まれてから一年と半年。最初こそ戸惑いはしたが、それでも自己のスキルを生かして活動している者は少なくない。

ギルドに属さず、単身で冒険者協會やNPC——町の人々から依

頼を受けるなんでも屋だつて存在する。

この異世界にやってきて、何もしないという選択肢を『良し』としない人々は、どんな形であれ元の世界に戻るその日が来るまで、この ファンタズマゴリア という異世界で生きることをご容認し、生きるための手段を模索して今も活動している。

だから――

――だから、それでも何もしないプレイヤーたちは、彼らは、本当の意味で《敗者》だった。

現状に恐れ、怯え、絶望し、なにをするでもなく、だが潰えることも出来ず、ただ惰性のままに生きているだけの無意味な日々を送るだけの自分を忌みながら、それでも何かをする気にもなれず、結局毎日と同じく過ごし、誰かが現状に終止符を打ってくれるに任せただけの存在となった。まさに敗北者。

時折街に姿を現しては、近くにいた人間に罵詈雑言を吐き捨て、時には暴力まで振るって騒ぎを起こす。

精力的に活動しているプレイヤーたちを見つけると、彼らは口々に同じことを叫ぶ。

言葉の類はそれぞれ違っていても、その意味は大抵三つに要約で来る。

曰く――何故、こんな状況で呑気に商売しているのか。

曰く――攻略組なら休まずに、現状を打破するために歩き回れ。

曰く――お前たちがそうやって毎日活動しているのは、自分たちへの当てつけなのだろう。

そして最後には決まって「馬鹿にしゃがって！」という捨て台詞

を吐いて、何処へともなく消えていくのだ。

酷く傲慢で、自己中心的な発言を繰り返し、粗野な言動で周囲に迷惑をかける、ある意味PKよりも性質の悪い存在となりかかっている《敗者》たち。

しかし、この ファンタズマゴリア に元から存在している住人であるAI NPC（自己成長型人工能搭載ノンプレイキャラクター）——通称アインたちにとって、彼ら《敗者》も、攻略組も、それ以外に精力的に活動しているプレイヤーも等しく同じ存在のように見られることも少なくない。

一年と半年前。突如この地に姿を現した数万を始め、各地に点在知る大都市に唐突に姿を現したプレイヤーたちは、この異世界でも一時期話題に上がるほどの大事件となっていた。

その事件は結局うやむやのまま集束していったが、その時飛び交った噂の中の一つが、プレイヤーすべてに浸透している。

——《来訪者^{ビシター}》。

それはこの ファンタズマゴリア に伝わるある伝記に由来するという。

——この世界に異変が訪れる時、異界の地より力持つ者召喚されたり。

彼の者たち、その身に培う力を以て、救済の光とならん。
異界の地より訪れし者たち——その名《来訪者》と呼ぶ。

そう言う伝記が、この世界には存在するという。

よくある御伽噺だが、一部の聖職者などはその話を持ち上げて、プレイヤーたちのことを救世主と呼ぶ者がいるらしい。

無論、そんな話は事実無根。体の良い与太話だ。

だが、いつの頃からかその呼び名は当たり前となっていた。誰が言い始めたのかは知らないが、多くのプレイヤーたちがその名称を使い始め、気づけば総称するのが普通になっていた。

——《来訪者》。

その呼び方に間違いはないだろう。
望む望まないにしろ、自分たちはこの地に訪れた。
やって来てしまった。

それは来訪と呼んでも相違ない。その名が意味するこの世界での
役割などは知ったことではないが、プレイヤーと自分たちを称する
くらいならば、そちらの名を使った方がまだ聞こえがいいだろう。
その程度の考えに過ぎない。

そして、その程度でいい。

望まぬ来訪であれど、彼らは今こうしてこの地に存在している。
冒険者として。

そして、《来訪者》として、この異世界に生きている。

——元の世界に帰ることを渴望し、

——かつて生きていた現実を夢見て、

それでも今この瞬間、彼ら《来訪者》は ファンタズマゴリア
の空の下に存在していた。

Act 2：〈来訪者〉（後書き）

遅れながらも、何とか続きをうpできて一安心の白雨です。次の話「Act 3：行く末は見えず」にてプロローグ『リィヴァース』を終わらせて第一章に移る予定です。11月中には『リィヴァース』を終わらせる予定です。今後もしなにもお願いします。

Act 3：行く末は見えず

裏路地に連なる煉瓦造りの小さな家の玄関。そのドアをリユーグはノックもなしに、無遠慮にくぐる。

玄関をくぐると、埃と若干のカビ臭さが鼻腔を刺激し、リユーグは呆れたように顔を顰めながら廊下を歩く。

家の中の窓はすべて閉め切られていて、自然の光は一切遮断されていた。魔術によって発せられている僅かな人工の光のみが廊下を照らしていて、リユーグはその光を頼りに薄暗い廊下を歩いてこの家の主を探す。

いくつかある部屋を覗いては通り過ぎ、除いては通り過ぎ——それを数度繰り返して、彩王の部屋へと至る。

ほどなくして、その主は見つかった。

家の一番奥の広い間取りの部屋。そこは四方の壁一面に巨大な本棚が並び、部屋の全体に大量の書物が散乱していた。積み重ねられた書籍は山となり、あるいは天井にまで届くような塔を作っている物まである。

その山の、あるいは塔の一つ一つが、この部屋の主が蓄積した知識の量を顕著とする。積み重なった分だけ彼はこれを読み解き、その記されている内容を己が知識へと変えている。

寝食の時間を惜しみ、ただ知識の探求を優先する賢人は、大きめの椅子に身を沈めるようにして座り、分厚い本に目を通していた。腰辺りまで伸びた銀髪と、その全身を包む黒の法衣が床に垂れている姿は、良くて無造作、悪く言えば随分と自堕落な体たらく、と言ったところ。

「……リユーグか」

部屋の中央に座す賢人は、腕の中の本から目を逸らすことなく侵入者の名を呼んだ。名を呼ばれたリユーグは、自分には目もくれず

に紙面に記された文字を括目する友人の様子に苦笑する。

「四日ぶりに覗いてみたが……もしかしくとも、君は四日間その姿勢のままで本を延々と読んでいたのか？」

「そうだが」

彼は言葉少なにそう答えた。言外に「何か問題でもあるか？」と全身が訴えてくるような気がして、リユーグは「いいや」とかぶりを振った。

「君の本に対しての貪欲さは今に始まったことじゃないからな。最早突っ込むだけ無駄なのは骨身に染みている」

部屋に入ってすぐの所に積み重なっている書籍の山の一番上に乗っている本を手に取り、中身をパラパラと捲って目を通す。

絵本、純文学、語学、神秘学、地学、法律、詩篇や伝記。そして魔道書……積み重なっている本の類に統一性はなかった。

伸ばした手の先にあつた本を片っ端から読み漁り、読み終えた本を積み重ねたのだろう。読んでいる本人も、あれが読みたい——といった目的を持って読んでいるのではない。ただ知識を蓄えるために読んでいる。

だから読む本のジャンルは関係なく、読める物ならば何でも読む。まさに読書の踊り食い——いや、ごた煮みたいなものだろう。必要なのは「何が書かれているか」ではなく「何について書かれているか」。

そこに彼の求めている情報のほんの断片——それを見つけるために、彼——ヒュンケルはひたすらに書籍を読み漁っている。

この部屋を埋める勢いで積み重なっている本の山は、情報への渴望による産物に過ぎない。ただし、成果があつたかないかと言われれば、それは定かではないが……。

リユーグは手に取った本を片手で閉じて、それを積み重なった本の山の上に置き——徐に椅子に座すヒュンケルに視線を戻す。

「それで、成果の程はどうなんだ。探していた情報は見つけられたのか？」

「いいや。まったく」

初めて、彼は本から顔を上げてリユーグを見た。深紅の双眸を不快気に細め、僅かに嘆息してからかぶりを振って見せる。

「——何も。そう、何も見つからないさ。予想はしていたがな……」
「パタン……と、手にしていた本を閉じて投げやり気味に彼は言う。
「どんな本を読んでも、俺たちの巻き込まれた現象に関する資料は……今のところない。そしておそらく、この先も見つからないだろうと、俺は漠然と予想している」

手にしていた本を、座る椅子の傍に積み重なった本塚の上に置くと、彼は小さく欠伸をし、顰め面になると、

「それで、お前のほうはどうだった？ 何か収穫はあったか」

そう尋ねるヒュンケルの問いに、リユーグは苦笑しながら肩を竦めて答える。

「こつちも、君に同じく——だ。東のレノンデム山脈にある深度五〇階層の遺跡……あそこの最深部まで探索してみたけど、結局何もなし。値の張りそうな宝物はあっても、僕ら《来訪者》の求めるものは欠片一つ見つからなかった」

「だろうな……」

リユーグの答えに、ヒュンケルはさして驚いた様子もなく、小さく鼻を鳴らすだけで納得したように首を縦に振る。

「……手詰まりだな」

ぼそり、と呟かれたヒュンケルの言葉に、リユーグは無言で頷いて見せる。

「俺たちがこの ファンタズマゴリア という異世界^{ゲーム}に取り込まれて優に一年と半年……攻略組が活動して一年。だが、未だに光明——即ち現実^{リアル}へ帰る手段は分からずじまいのまま……まったく、手づまり以外の何でもない状況だな」

「実際に、冒険者協会の掲示板にも、それらしい報告は一切なかった。攻略組も、やはりなんの成果も得られていないと考えるのが妥当だろう」

ヒュンケルの現状確認に、リユーグが補足しながら肩を竦めた。
「攻略組は、現在どの辺りにいる？」

「確か、北西のズイスイボラス大陸方面の南だ」

リユーグの言に、ヒュンケルは苦虫を噛むように顔を顰めながら頭痛に悩まされているかのように眉間にしわを寄せた。

「つまりは、サービス開始から三年目の領域というわけか。先は長いな……」

ヒュンケルは過去のMMORPG ファンタズマゴリア のバージョンアップによる拡張と、現在の進行具合を照らし合わせながらそう呟く。

ゲームであった頃の ファンタズマゴリア は、毎日多くのプレイヤーの手によって公開され、事細かくアップされ続けたデータの増量に伴い、サービス開始時から数回、大がかりなバージョンアップが行われていた。

それに伴い、 ファンタズマゴリア というゲームの世界は回を増すごとに拡大されていた。サービス開始当初は古都ユングフィを中心とし、四方に広がる草原、山脈、湿原、荒野の四つエリアのみが設けられていたのだが、第一回のバージョンアップによりそのマップフィールドは遥かに広大化し、十六のエリアが開設された。同時に製作可能アイテム幅の増大化や、自己開発プログラムのアップ容量の拡張など、プレイヤー側の自由度を追求する ファンタズマゴリア において、ゲームプレイヤーだけではなく、プログラマーや創作活動者などの活動をより快適にするための情報負荷の軽減システムの強化・導入も相まって、バージョンアップ後の ファンタズマゴリア ユーザーの並みならぬ反響を生んだ。

その後も不定期に行われたバージョンアップにより、当初は古都ユングフィとその周辺のみだった ファンタズマゴリア のフィールドは、今では海を跨いで四つの大陸が存在する状況にまで発展している。

ヒュンケルの言う三年目の領域というのは、そのバージョンアップに伴って開拓された新大陸の攻略度合いを示したものだ。

ゲーム時代、古都ユングファイを中心にした大陸——ユーノリア大陸全体をプレイヤーたちが踏破するにいたった歳月は優に二年と半年以上。その後、プレイヤーの半数以上がユーノリア大陸の踏破を果たし始めたのに合わせてバージョンアップが行われ、追加された新天地がズイスイボラス大陸。

それにより多くのプレイヤーが第二の大陸——即ちズイスイボラス大陸に大移動したのが、サービス開始から三年目だった。

ヒュンケルが言っているのは、この異世界 ファンタズマゴリアに《来訪者》たちが現れてから一年半かけて、ようやくその『第二の大陸』へと至る域に辿り着いたことを意味している。

「ペースとしては、悪くないと思う」

「それは同意しよう。正直、俺の予想よりだいぶ早いペースで攻略組は大陸踏破を果たした」

リユーグの言葉に、ヒュンケルは同意を示すように首肯しながら新しい本を取り、それを開いて再び文字に目を移し、

「まあ、最上位のステータス持ちたちが傍観を決め込んでいなければ、もっと早い段階でズイスイボラスに辿り着いていただろうがな

……」

「それは言ったら駄目だろ、当事者として」

そう自嘲するように呟いた言葉に、リユーグは苦笑を返すしかなかった。

リユーグにヒュンケル。この二人は現 ファンタズマゴリアにおいて、間違いなくトップに位置するステータスパラメータを保持している《来訪者》だ。それは約半年前の《竜血に染まる法剣》入手クエストをクリアしていることから、最早語るまでもなく証明できる事実の一つ。

だが、それはリユージュたちだけではない。

リユージュたちに並ぶ、あるいはそれ以上のステータス保持者は、現状の ファンタズマゴリア に極少数ではあるが存在する。攻略組をはるかに凌ぐほどにパラメータを鍛え上げている《来訪者》たちを、リユージュたちは知っている。

そして――彼らの誰一人として、攻略組にその名を連ねていないことも。

本のページを捲りながら、ヒュンケルは思案顔でぽつりと言葉を漏らす。

「ただ、攻略していけばいいわけではない。ゲームを攻略するだけで現状を打破できるのならば、俺たちだって攻略の最前線に臨むだろう。だが――」

「もし攻略し続けた先に、何もなかったら……か」

彼の言葉を、リユージュが継いだ。ヒュンケルはそれを無言で肯定する。

リユージュたちのようなトップクラスのステータス保持者の多く攻略に参加しない理由。それは攻略をし続けたとしても、現状を打破する術がないのではないかという可能性を危惧しているからだ。

故に、彼らは積極的に攻略を急ぐことはしない。無論、攻略した結果、 ファンタズマゴリア から現実に戻帰することができるのならそれに越したことはないが、攻略を性急し、その先に何もなかった場合、多くの《来訪者》たちを襲う絶望は文字通り想像を絶するだろう。

そしてそれが攻略もせず、このユングフィに留まり続けている《敗者》たちに知れ渡った場合に生じる事象など、考えるまでもない。たとえ彼らがどれだけの暴動を起こそうと、所詮ユングフィに籠り切りでステータス値がほぼ初期値から変動していない彼らを制圧

するのは、攻略組からすれば造作ないことだが、帰る手段が見つからずに途方に暮れた彼らが、その暴徒に加わらない可能性はゼロではない。

そうなれば、《敗者》の暴動などとは比類にならない事態に陥るだろう。最悪、高位の《来訪者》同士による殺し合いに陥る可能性も少なくない。むしろ、そうなる可能性のほうがはるかに高い。

愚かだと人は言うだろう。だが、極限状態の中で追い詰められた人間が、見知らぬ異世界で生活し、戦いに明け暮れ、それで理性を保ち自制するというのには限界がある。元々《来訪者》とは、剣も魔法も冒険も戦いも無縁な場所で生きていた、所詮ただのネットゲーマーでしかないのだ。むしろ現状が保たれていることすら奇跡に近い。

無論、現状維持が保たれ続けているのは、ひとえに伝説的ファンタズマゴリアプレイヤーの力によるものではある。

「……あれだけの攻略組や、そうでない中級組を一手に統括できる辺り、流石は《十二音律》筆頭だ」

「それはそうだろう。元々ファンタズマゴリア最大規模のギルド『十種神宝』^{トクサノカンダカラ}のギルドマスター……最盛期はギルドの総員が数万に及んだ中で、完全に彼らを統括していた人格者だ。攻略組のただか二千弱に、中級組の五千程度、あの男にすれば造作ないことだろう」

ヒュンケルの言に、リユーグは「それもそうだ」とでも言うように肩を竦めて微苦笑する。

ギルド『十種神宝』とは、MMORPGファンタズマゴリアにおいて最大の規模を誇ったゲーム史上においても名を知らぬ者はいないほど有名な蒐集団体組織^{コレクターギルド}である。

その目的は、ファンタズマゴリアに存在する数万単位の武器の全蒐集という、言葉にすれば単純だが、その実途方もない労力と時間を要するような実現不可能な所業を目的として掲げ、成し遂げようと日々東奔西走し続けていた高レベルプレイヤー集団。

彼ら『十種神宝』は、レアリティの高い武具を入手するためならば多少の横暴ならば厭わず行い、時には力押しの手段すら辞さないその姿勢から、他の武器コレクターからは忌避されてすらいいたほどの蒐集団体だ。

リユーグやヒュンケルも、ファンタズマゴリアがゲームであった頃に幾度か集団で襲われたことすらある。その行動は犯罪者ギルドすれすれの悪徳行為とすら思えたが、あの時はギルド員の勝手な暴走——というか、実際に『十種神宝』に紛れ込んでいたオレンジプレイヤーだったのだが、この話は割愛するべきだろう。

ともかく——そんな荒唐無稽なギルド方針にも拘らず、ファンタズマゴリア 最強と目されるプレイヤーでありギルドマスターである草薙くさなぎの下、ファンタズマゴリアでも知名度の高い高レベルプレイヤーが多数所属していたこともあり、その人気は他のギルドの通髓を許さぬほどだった。

ギルド最盛期のギルドメンバーの数は二万弱に昇り、それほどのギルドメンバーを一手で束ね上げ、当時のファンタズマゴリア最難関と言われ続けていた攻城戦クエスト『ディヴァユガの門』攻略を成し遂げて無数の高レアリティ武器や素材アイテムを手に入れた見せた手腕は、未だに多くの《来訪者》たちの記憶に刻み込まれている。

それだけの手腕を見せたプレイヤー草薙は、現在高レベルプレイヤーの筆頭として唯一最前線で戦っている伝説級武器保持者であり、ファンタズマゴリア最強の刀使いと謳われ、同時に最も強い《来訪者》として攻略組のカリスマと化している存在。

人を束ねることにおいて、おそらく現ファンタズマゴリアに存在するプレイヤーの中で、彼の右に出る者は、今後も現れることは決してないだろうというのが、リユーグとヒュンケルの評価だった。

だが、彼一人が終始戦い続けることはできない。どれだけ彼がファンタズマゴリアにおける最高位のプレイヤーであろうと、伝

説級武具保持者であろうと、限界はあり、彼に通髓する攻略組も、ただひたすら攻略に徹することはできない。

攻略するには当然、個々の《来訪者》たちそれぞれにそれ相応の力量が要求される。

ステータスの数値は勿論のことだが、それ以上に要求されるのが個人の戦闘技術——瞬間的なスキル選択の判断能力や通常攻撃の精密度。動体視力に反射神経。様々な実戦に必要なとされる技巧の強化は、究極的に日々の反復練習や実戦経験に基づいて鍛えられるため、一朝一夕では強化できない。

そんなことをしている暇があるのならば次のダンジョンなどの攻略を行えという声も上がるが、鍛え上げなければその攻略すらままならないのが現状なのである。

そういうわけで、攻略組は攻略を終えるたびに一定の期間は自己鍛錬などに勤しみ、攻略組を指揮する草薙が大丈夫と判断したら攻略に挑む——後はその繰り返しだった。

しかし、その方法も『第二の大陸』に攻略の手が伸びた辺りから負荷が見え始めてきたという噂が舞っている。

実際、ヒュンケルが草薙からもらった情報によれば、攻略組のメンバーにも限界が来してきたという。

その話を聞いた時、リユーグは「それは無理もない話だ」と感じたくらいだ。

幾ら《来訪者》と呼ばれていようと、元々の彼らは現代社会に生きる一般人なのだ。何か武術に精通しているわけでもない、一介のゲームプレイヤーに過ぎない。

そんな彼らにたかだか一年と少しの間に、ゲームや漫画の中のみ存在するような圧倒的な戦闘技術を持つ戦士になれるという要求のほうで、俄然無理に決まっている。

MMORPG ファンタズマゴリア のPCがどれだけ『超人』と言えるような凄まじい戦闘技術を持っていたても、それを操るプレイヤーたちは、言ってしまうえば平和ボケした凡人に過ぎない。むしろ

現状すら称賛に値するだろう。

——ともかく。

此処二月あまり、攻略組は『第二の大陸』の攻略に手間取り、その成果は微々たるものというのが現状だった。

「——つまり……俺たちみたいなのは、他の方法を模索したままその片鱗すら見つけられず、結果——考察はすれど集団が見つからず停滞気味。そして攻略組は、俺たちのような突出しすぎた戦力が足りないから、一年半かけてようやく『第二の大陸』の攻略開始だが、遅延気味——まさにどん詰まりとはこのことが」

状況を鑑みながら、ヒュンケルは天井を仰ぎ見そうばやいた。リユーグは苦笑を返す。

「まあ、言ってしまえばそう言う状況だね」

「何か手はないのか……」

「あれば、とづくに試すさ」

「違うない」と、リユーグの言葉にヒュンケルは同意を示し、二人揃って肩を竦めた時だった。

玄関のほうから凄まじい音が響き、続いて慌てた様子のドタドタという駆け足気味の足音が廊下から聞こえ、二人は顔を見合わせた。

「何の音だ？」

「さあ？」

答えながら、リユーグはひょいと廊下を覗きこみ——そして何処か納得したようにうんうんと首を上下させる。

そしてヒュンケルを振り返り、微苦笑と共に口を開く。

——大きなからかいと、若干の癖みと皮肉を込めて。

「——通い妻の」登場」

「……」

返答は無言だったが、ヒュンケルの表情は言葉よりも如実に彼の心境を表していた。よっぽど新たにこの家を訪れた客に会いたくないのか、それがただのポーズに過ぎないのかはさておいて、

「通い妻——ね。貴方にしてはマシな呼び方だと思う」

家の中をさまよった挙句にこの部屋の入口へやってきたその来客——長い銀髪を靡かせる少女は、その長い銀髪の間から覗く濃い紫色の双眸でリユーグを見上げ、彼の言葉にそう嘆息しながら無表情に繰り返す。

その少女——表情こそはほとんど感情を表さないが、端正な顔立ちをしており、全体的に小柄な体軀を白を基調とし、紫の縁取りをされた衣装に身を包んでいる。

騎士の典礼衣装を彷彿させる、ドレスとも鎧とも表現し辛い奇妙な衣装だ。

《ゴシックナイト・ドレス》。

膝下まで伸びる幾層ものフリルで覆われ、胸元や腕を騎士鎧で補強した奇抜なその衣装は、リユーグの纏う白銀のコート《アークナイト・コート》に並ぶAAAランクの軽鎧であり、女性専用防具の中でも随一の性能を誇る《プレイヤーメイド》の防具だ。

そして左手を包む凶悪な鉄爪を携えた、金色の光を纏う禍々しい手甲が、リユーグを威嚇するように「カチャリ……」と鳴る。

見上げる視線に何処か敵意を込めてでもいるのだろうか——少女はリユーグを無表情ながらに睨み据える。それだけで相手をい殺せそうな、気の弱い者ならばその場で震えあがりそうな威圧感。

少々幼さを感じないこともないが、それを踏まえた上で見てもまごうことなく美少女と呼ぶに相応しい容姿をしているのに、その無表情がすべてを台無しにしているような気が、リユーグはしてならなかった。

ついでに言えば、なぜこのような美少女が半年近く、このカビ臭く薄暗い部屋に引きこもりっきりの親友の下にほとんど毎日通い詰めているのか不思議でならないが、同じようにほとんど毎日この家

を訪れているリユーグは、どういふことかこの少女に敵意にも似た感情を抱かれているのだけは分かった。

言葉なく向けられてくる視線のだけの威圧感に毎日晒され、何処かうんざりとした感慨すら胸中に生じている。

だが、リユーグはそんな感情などおくびにも出さず、そして少女の視線に対して僅かな恐怖も抱くこともなく、涼しげに壁に背を預けて腕を組むと、からかうように笑った。

「脱『通い』して、後の一文字だけで呼べる日を、からかいと野次馬根性を織り交ぜながら期待しているよ？ ユウ」

実際、それはリユーグの本音であつた。

どんな経緯があつたのかは知らないが、その経緯を経てこの少女がヒュンケルに好意を抱いたのならばこれはまたとない機会だとすら思っている。

ヒュンケルの友好関係は極端に少ない。

もうこれでもかというくらいに少ないことを、リユーグは知っていた。それもそのはず。リユーグとヒュンケルはリアルでも交流ある親友なのである。

そもそもMMORPG ファンタズマゴリア をリユーグのプレイヤーである日口理宇が参加するきつかけとなつたのは、βテストプレイヤーの公募にヒュンケルのプレイヤーである吾妻向吾が、理宇の分まで勝手に応募し、二人揃って当選したことを知らせる向吾の電話を受けて初めて知らされたことが原因だった。

あの日その一報を貰つた数十分後には理宇は向吾の家に殴り込み、その場で大喧嘩となつたのも今では懐かしい記憶と割愛し——兎も角リユーグにとって、ヒュンケルの他者との交友の無さは仕方がないと感じながらもどうしたものかと危惧していた。

そもそも、リアルのヒュンケル——即ち吾妻向吾は、先天性白皮症——俗にアルビノと呼ばれる病気に似た病を患っており、外出することは愚か、紫外線を完全遮断する施設完備の整つた自室から出ることもままならない生活を強いられている。

それ故必然的の外部との交流はほとんどなく、幼少期に障害により一般の学校に通えないような子供に最低限の学習を施す施設で出会った者たちを除けば、ヒュンケルの知人友人はネットの海で出会った者たちばかりであり、そのネット交流のあった人間のほとんどは、この ファンタズマゴリア に取り込まれるという現象の被害にあつておらず——また、PCの全データ初期化という《来訪者》^{プレイヤー}たちが誰一人として得をしない処理を施されたことにより、過去それなりに存在したフレンドリストも初期化され、リユージュと合流後はほとんど二人で活動していたこともあり、現状のヒュンケルの交友関係はほばないに等しかった。

そしてリユージュの知る限り、ヒュンケルは自身の知己^{ちぎ}以外に対しではその存在を認識していないかのような無関心となる。

かつてヒュンケル——吾妻向吾の部屋に訪れた新人の医師がどれだけ話しかけようと一切耳を貸さずに約半日無視し続け、新人医師が逃げ出した惨状を目の当たりにしたりリユージュ「口理宇は啞然とし、子供ながらにその意思を哀れに感じたことを今でも忘れない。

つまるところ——彼が顔を合わせて言葉^{アイン}を交わす《来訪者》は最早ごくわずかとなり、それ以外の者は一般人であろうが《来訪者》がほば無視を決め込むという人として悪質極まりない性質の人間へと成り下がっていた。

ここまでくれば、もはや脱帽——処置なしとリユージュが思っていた。

そんな男を——他者との交流が極端に少なく、その原因となった病をこれ見よがしに免罪符にし、他人との交流を極端に拒むこの男を意識する女性が現れた。

一体何の経緯があつたのかは知らないが——ヒュンケル「我妻向吾

が、異性に意識されているという状況をリユーグが見逃すはずもなく——ヒュンケルの下を訪れるこの少女を焚き付けることにしたのだ。

リユーグの言葉に、少女——ユウは僅かに嘆息し、ヒュンケルを見つめながら僅かに肩を上下させる。

「本当に…… そうなる日が来たらどれだけいいことか」

「大丈夫。今は頑なに拒んでるけど、それを籠絡すればユウの勝利だ」

「それは本当かしら？」

いぶかしむユウに向けて、リユーグは至極真面目な表情で大仰に頷く。

「断言してもいい。ヒュンケルはそう言うところに関しては愚直なくらい真面目だ。手を出したのなら、相応の覚悟を持った証拠」

語尾に音符くらい付きそうな弾んだ声でリユーグは断言する。その言葉に、ユウは口元に手を当て、何やら思案するように眉を顰める。

「つまり——暫くはこのまま甲斐甲斐しく通い詰めて身の回りの世話をして……」

「ヒュンケルの様子を窺うのがベストだ。多分そのうち少しずつだけ様子が変わる」

「——おい」

再びヒュンケルが割って入るが、やはり二人は無視して話を続ける。

「具体的に言うと、どんな感じに変わるのかしら？」

「知っての通り、あいつは読書と書作業している時は周囲に全くと言っていいくらい興味を示さない。ガン無視と言っていいくらいに周囲を無視する——はつきり言って下種の所業だ」

そうね。私がどれだけ部屋の掃除や整理をしても、食事を作って持ってきてても生返事するだけで目も緑れないわね。彼が作業の手を止めるのなんて、貴方が来たときくらいだもの。嫉妬で気が狂いそ

うになるのを我慢するのも大変——というのは置いておいて、正直……最低と、たまに思うわ」

間に入った、ぞつ……とするくらい底冷えする声音で囁かれた一言にリユーグは乾いた笑い声を上げるだけで、あえて何も言わないことにした。誰だって命は惜しい。

なお、随分と酷い言われようだが、二人の話に関してヒュンケルは何一つとして否定することができないため「うぐ……」と小さく唸り、ただ押し黙るだけに留まるのをいいことに、二人は顔を寄せてひそひそと話し続ける。

ひそひそ、と言う割には随分と声音が大きいのは、当然ながらわざとだ。

「それで、それがどんな風になるの？」

「これは推測にすぎないけど——まず目で追うようになる。本当に些細な変化だが、これが重要。ヒュンケルが一つに集中すると他がおろそかになるヒュンケルが、だ」

「確かに、それは大きな変化だわ。そして——それが意味するものは？」

「ヒュンケルは基本、興味が無い相手には干渉しないし愛想もない。そのヒュンケルが目で追うということは——」

「私に興味を抱いた——と？」

「いや、もしかしたら一段階超えて……好意を抱いた——かもしれない」

「——うおい！」

ヒュンケルが声を荒げる。が、やはり二人は無視し——

「そうになったら——」

「あとは既成じじ——」

——リユーグが言葉を言い終えるよりも早く、ズガンツ！という銃声が室内に轟き、同瞬複数の鈍い金属音が木霊する。

いつまでもドラドラと無駄話を続ける二人の様子についてブチ切れたヒュンケルが、愛銃《竜牙の黒銃》を抜き発砲——その射線上

にいたリユーグは金色の片手剣を、ユウは複雑な意匠の凝らされた大鎌を瞬時に抜き放ち、自分たち目掛けて発砲された弾丸を受け流^{バリ}したのだ。

銃弾を造作なく凌いだ二人に向け、ヒュンケルは握る銃の撃鉄^{ハンマー}を上げ、引き金に指を掛けながら、冷淡に問うた。

「——何の話をしている？」

「強いて言うならば、お前をどのようにすれば攻略できるか——だ
と思う」

怒気を剥き出しにしているヒュンケルを相手に、しかして慣れ親しんだリユーグは朗らかに笑ってそうのたまった。

「ヒューゴに訪れた遅い春のためならば、僕は身を粉にし、多少強引な手を使っても成就させて見せる！」

ぐっ！ と胸元で握り拳を作りながらそうのたまうリユーグに、ヒュンケルは真剣に怒りを覚えたらしく、弾奏を入れ替え、怒気を孕ませたまま冷やかに告げる。

「世に——それをいらぬ世話というんだ。この馬鹿たれが」

ちゃき……と銃口を、不満気に口を曲げるリユーグに狙い定めながら、ヒュンケルはもう一つ質問を投げかける。

「——本音は？」

リユーグはにっこりとわざとらしい笑顔で即答した。

「断然——面白いからだ」

室内に再び銃声が木霊したのは、言うまでもなかった。

眉間目掛けて発砲された銃弾を、リユーグは剣を振るい、紙一重でパリイする。

「おまつ……今の弾道起動だと、僕の額に風穴が開くところだったぞ！」

「当然だろう。狙ったんだからな」

リューグの青ざめながらの絶叫に、ヒュンケルはしたり顔でさらに即答した。

「お前、無二の親友を殺す気か」

「無二とか言うな。まるで俺が寂しい人間のようにないか」

「実際寂しいだろう。体質のせいもあるけど、普段外に出ることもなく、ネットの通信で講義を受けているから実質人との交流なんて家族を除けば僕だけだ」

「リアルの事情をネットゲの中で暴露するんじゃない！」

椅子の膝掛けを思い切り殴りながらヒュンケルは苦い顔をしながら叫ぶ。

ヒュンケルにとって、現実の吾妻向吾の患う病と、それに伴う他者との交流の少なさは、多少なれどコンプレックスとなっているのである。

無論、リューグはそれを知っている。知っているが、あえて彼はヒュンケルの弱い部分を指摘してからかっている。

ヒュンケルもそれは分かっているの、本気で怒っているわけではなく、ただのポーズ（ふり）だ。が、やはり自分の事情を知らない人間の前で話されたのが気に食わなかったのか、あるいは事情を知らぬ人間の前でわざとその話をしたリューグに呆れているのか、彼は大きく肩を竦めて溜息を洩らす。

そんなヒュンケルの様子を見て、リューグはちらりとユウに視線を送る。

すると彼女はまるで全てを心得たといわんばかりに視線で応え、ヒュンケルに告げた。

「大丈夫。私が添い遂げればそれで問題なし」

「——大ありだ！」

ぐつと胸元で握り拳を作りながら励ますように嫁入り宣言するユウに、ヒュンケルは怒ればいいのか呆れていいのか分からず、複雑そうな表情をしながらユウの申し出を却下する。

暫しの沈黙ののち、ユウは施政をそのままに視線だけをリユーグへと向けて、僅かに首を傾げた。

「——ああ言ってるけど？」

「照れ隠しでしょ」

にこりと笑って迷いなく答えたリユーグ。

「つまり——本音は？」

「凄く嬉しいんじゃないかな？」

「人の心境を捏造するんじゃない！」

弾奏を新しい物に入れ替えながらヒュンケルが叫ぶ。目尻を吊り上げ、鬼のような形相でこつちを睨むヒュンケルの様子を見て、ユウはその半眼の双眸でリユーグを見上げる。

「一体何が足りないのかしら？」

「好感度じゃない？」

「どうすれば上がるのかしら？」

「取りあえず——餌付けしとけばいいと思うな」

至って真面目に問うユウに、リユーグは面白半分に返答を繰り返している。

「——人生最後の言葉はそれでいいんだな」

絶対零度の殺気と共に発せられた呪詛の如き声音に、リユーグはびたりとその挙動を制止して、ゆっくりと笑顔を張りつけたままの顔をヒュンケルに向け——即刻にバックステップ。

次の瞬間、先ほどまでリユーグが背を預けていた壁に幾つもの銃弾が叩き込まれ、複数の銃創が出来上がる。

廊下へと退きながら、リユーグは幽鬼の如くゆらりと立ち上がりながら両手にそれぞれの愛銃を握り締めたヒュンケルを見て、剣を片手正眼に構えながら酷くゆっくりとした動作で歩み寄ってくるヒュンケルに危機感を覚える。

（……調子に乗り過ぎたかな）

先ほどのまでのリユーグの言動は、客観的に見れば誰がどう見ても悪ノリをした域だったのだが、それに今更気づいても後の祭り。後悔は先に来ないもの。

改めてそれを実感しながら、リユーグは摺り足気味に後退。

「それじゃー……そろそろ俺はおいとまするよ……——ユウ、是非とも頑張つて」

「——言いたいことはそれだけかあああああ！」

最後の余計な一言が契機となつたのだろう。ヒュンケルは怒号と共に銃爪を引く。

それに合わせて、左右の銃口から連続して銃弾が射出され、

「お邪魔しましたあああああああああ——！」

銃弾の雨が飛び交う廊下を全速力で走り抜け、ほとんど玄関の扉を壊す勢いで蹴り開けながら、リユーグはそう去り際のあいさつを残し、友の乱射する銃撃の攻撃範囲から死に物狂いで脱兎した。

「任された」

走り出す間際、そんな無感動な少女の声が聞こえたような気がしたが、それを確かめる術など必死に逃げ出したリユーグには存在しないのだった。

「——と、いうわけなんですよ。酷いと思いませんか、サクヤ姐さん？」

「私からすれば、どっちもどっちだよ。リユーグ」

カウンターの椅子に座つて背もたれの上で腕を組むリユーグの言

葉に、黒髪の少女——サクヤは、呆れた様子で溜息を洩らした。長い黒髪を後ろで一つに束ねた和装の鍛冶師は、金床の上に乗せられた、高温の炎を浴び続けて赤光を放つ鑄塊キャストを鋤で叩き、視線を逸らさずに言う。

「お主は大概あの男をからかい過ぎだ。そりゃ怒るなと言うほうが無理だろう?」

「まあ、分かっててやったのは認めますけど……あのヒュンケルの傍に女性の影が見え隠れしたら、正直茶化すなというほうが無理だと思っんですか?」

「……まあ、否定はしないな」

リユーグの言葉に、黒髪の少女は何処か納得したという風に頷いた。そして、

「では——逆に訊きたいな」

「何をです?」

にやりと笑うサクヤに、リユーグはいぶかしむように眉を顰めながら訊き返すと、彼女はにんまりと笑い、楽しそうな声音で問うた。「あの男に女の影が現れたのも驚きだが……お前さんのほうはどうなんだ? ん?」

「うげ……」

「物凄く苦虫をかみつぶしたような顔をするな、お前さんは……」

質問にうめき声で答えたリユーグの表情を見て、サクヤは呆れた様子で口をへの字に曲げた。実際、リユーグの表情は酷く渋面であり、わざとらしくため息をついてがつくりと肩を落として見せる。

「いやぁ……僕はなんというか、あれですよ。女性と縁がないというか、ヒュンケルほどじゃあないにしろ、交友関係はわりと狭いというか……」

「どの口で言うか。まったく……」

リユーグの何処かはつきりしない——言ってしまえば煮え切らない態度に、サクヤは心底呆れ果ててしまう。

そして次の瞬間にはにんまりとした笑みを口元に浮かべ、からか

うようにサクヤは言う。

「ならば——お前が別々の場所で別の女とあっている噂が私の耳に届いているのはどういうことか、説明して貰えるか？」

その言葉に、リユージュの表情が絵に描いたように青ざめる。拳句、
「……な、何のことだか、僕にはよく分かりませんねー」

視線を反らし、錆付いた人形のようなゆっくりとした挙動でそっぽを向くリユージュに、サクヤは鎚を振るいながら言葉を続けた。

「『ガーディアン』のユーフィニア」

「うぐ……」

「女版のヒュンケルと名高い賢者、ルーテ」
ウィザード

「おう……」

「猫人族の射手、リーシャ」
ケット・シー スナイパー

「うわーお……」

「スキアエルフの隠斥者、フューリア」
スカウト

「あー……」

「そして私、鍛冶師のサクヤ」

「あははは……」

次々とサクヤの口から列挙される名前を前に、リユージュは笑うしかなかった。

こうして挙げられていく名前を聞いてみると——なるほど納得、と言いたくなるくらい、自分の交友関係に女性の影は事欠かない。

サクヤはいったん言葉を区切ると、鎚を振るう手を止め、乾いた笑いを発するリユージュを見上げる。

「——で、本命は誰だい？」

花咲くような笑顔でそんなことを聞かれても、リユージュとしては答えに困り、何と言えいいのか考えを巡らせていると、サクヤは

何を勘違いしたのか、得心がいったという風に頷いて、

「ああ……それとも全員同時攻略で、ハーレムエンドを目指しているのか？」

「何処のギャルゲーの主人公ですか、僕は？」

サクヤの見出した答えに、リユーグは呆れて半眼になりながらサクヤを見返し、かぶりを振る。

「別に、誰かを攻略するとか、本命うんぬん以前に、誰一人としてそんなに仲がいいとは一概に言えない気がしますけど？」

「ほう……たとえば？」

再び鎚を振るいながら、サクヤはそう切り返す。リユーグは頷に手を添えて、しばし黙考に耽り——おもむろに口を開く。

「たとえばユーフィニア。彼女は昔からギルドへの参加を促されますけど、そのギルドへの勧誘を除けば、彼女と会うことなんてほとんどないに等しいですよ」

「お前さんは、本当にただのギルド勧誘だと思っているのか？」

「それ以外に何がある？」

リユーグは迷わず返答する。実際、ギルドへ勧誘する以外の意図が、これまで彼女と交わした言葉の中に隠れているとは思えない。ユーフィニアは純粹にギルドの戦力強化を考えてリユーグを誘っているはずだ。むしろあの言葉に裏があるとすれば、一体どのような意図があるのか、逆にサクヤに質問したいくらいだった。

が、リユーグがそれを問うよりも早く、サクヤは「何でもない……」

……と言つてため息をついた。

「そうだな……お前はそういう男だよ」

「よく分かりませんが、それで貴女が納得したなら追求しませんよ」

「そういてくれ……まあいい。次は？」

いつの間にか、サクヤは作業の手を止めて身体ごとリユーグを向いて話を聞く態勢に入っている。

気のせいかな、視線に陰のあるような気がしなくてもないのだが、リユーグはあえてそれに気づかないように意識する。

「えーと……ルーテ、でしたっけ？ 彼女とは ファンタズマゴリア（こつちの世界） に来て間もない頃に出会って——それで都市ユングファイの図書館にほとんど籠りつきりで、食事もなくに取るうとしないから、たまに様子を見に行っているだけですよ？」

ユングファイには、現実世界で言うところの帝国図書館——即ち国立国会図書館級の蔵書量を誇る巨大図書館が存在し、リユーグがこの ファンタズマゴリア の世界にやって来て間もない頃に出会った少女——現在では魔術師ウォーロックの上级クラスである賢者となったルーテは、一日のほとんどどころか、二十四時間フルでこの図書館に引きこもり、そこに貯蔵されている書籍の山に埋もれながら読書の日々を送るという、なまじ女性版のヒュンケルのような行動を取っているのである。

その間睡眠は眠くなったら時に眠り、食事をするくらいなら本を読むと断言し、そしてその言葉通り、彼女は一切の食事をとらない生活を送っているのだ。

その徹底ぶりに、ついぞ見かねたリユーグは二日に一回のペースで様子を見に行くように心がけている。勿論、食糧持参で。

「……お前さんが会いに行くから籠ってるだけの気もするがねえ」

「何か言いました？」

「いいや、何も」

言葉とは裏腹に、サクヤは本気で呆れたように目を細めてリユーグを見据え、やがてため息を漏らして見せるも、リユーグには彼女の意図が伝わる訳もなく、彼はサクヤの溜息の意味を微塵も理解できず首を傾げた。

「ならば、リーシャはどうなのだ？」

「え、彼女とはクエストで何度かパーティを組んだだけの間柄ですよ？ まあ、たまに呼び出されてステータス上げに付き合わされますけど」

「やっぱりか……」

最早呆れを通り越し、何処かぐったりした様子でそう言葉を漏ら

して頂垂れた昨夜の様子を見て、リユーグは何を納得しているのか。そして何故そこまでぐったりとしているのか、いよいよ理解が追いつかず、彼自身も眉を顰めて眉間に指をあてた。

リーシャとは、猫人族の姿をした水色の髪が特徴的な弓使いである。短弓・長弓・弩などを得手とするクラス、狩人からクラスチェンジする二つのクラスの内、より弓を使うことに特化した射手となった後は、この古都ユングフィでも並ぶ者がないと呼ばれる最上位の弓使いとしてその名を轟かせている。

彼女とは単に ファンタズマゴリア がゲームであつた頃、軍団^{レイド}戦クエストなどで顔を合わせていたという程度に過ぎないのだが、この世界に訪れて再開後、たまにダイレクトメールなどで呼び出されてはクエストに同伴するようになった。

が、結局はそれだけの関係だと思うのだが、何故自分の交友関係の主だった面子に列挙されたのか、リユーグは不思議で仕方がない。

「はあ……それじゃあ、フューリアは？」

「姐さん、なんかやさぐれてますよ？」

「うん、お前のせいだから」

「分けわかりませんよ」

リユーグはかぶりを振った。しかしサクヤはそんな言葉になど耳を貸さず、金床を鎚で殴りつけ、甲高い金属音を響かせて恫喝する。「いいから答えろ！ フューリアはどうだ！？」

「怒らないでくださいよ……フューリアですか。彼女は——ユウの、友達ですよ」

「あの 死神 の？」

「はい。あの 死神 です」

サクヤの問いに、リユーグは首肯で返した。ちなみに 死神 というのは、ユウの持っている二つ名である。

—— 死神 ユウ。

彼女は《十二音律》に名を連ねる一人だ。それもこの ファンタズ
マゴリア に存在するクラスの一つ、呪術師からクラスチェンジす
ることのできる二つのうちの、最も扱いにくいことで有名であり、
千人に一人いればマシとまで言われるくらい嫌煙されがちな、使用
難易度最難と名高い呪葬鎌使^{デスサイズ}。

呪葬鎌使はその名の通り、物理攻撃力の高い大鎌と、魔力攻撃力
が高い《呪術》を武器に前衛後衛両方を兼任することのできるクラ
スなのだが、武器の性質、魔術の性質共に癖が強く、使いこなすこ
とが非常に困難と言われており、第一クラスで呪術師を選択した者
のほとんどは、クラスチェンジの際は後衛職において最強と目され
る精霊使い^{コントラクター}を選択するのが通例とされている。

興味本位で呪葬鎌使になる者もたまにいますが、その大体が呪葬鎌
使の使用難易度に悪戦苦闘し、その挙句にPCデータをリセットす
るくらいの不人気クラスだ。

しかし、使いこなし、且つ立ち振る舞いを間違わなければ、それ
こそ全クラス中最強と言っても過言ではない能力を持つ——いうな
れば究極的な玄人向けのクラスが、呪葬鎌使だった。

元々専用武器である大鎌は、大剣と両手斧の両方の性質を兼ね揃
えたような高い攻撃力と広い攻撃範囲を持った武器であり、大鎌ア
ーツ・スキルの多くは攻撃力が高く、範囲も広く設定され、そのス
キルの多くにHP吸収効果を宿している。

そして呪術師と呪葬鎌使のみが扱うことのできる魔術——《呪術
》は、敵にダメージを与えるだけでなく、様々な状態異常を引き
起こす性能を秘めたものが数多く存在する。

これら二つの性能をフルに活用し、アーツ・スキルの挙動や《呪
術》の詠唱時間などを計算に入れ、上手く戦場を動き回れる判断
力さえ兼ね揃えていれば、S級モンスターを相手に単身で挑んだと
しても引けを取らない性能を発揮することができるのだ。

無論、それだけの性能を遺憾なく発揮できるプレイヤーなど存在
しないに等しいと云われており、半ば常識化していた。

しかし、ユウはその常識を容易にぶち壊して見せた数少ない呪葬鎌使だった。

とある集団クエストに参加したユウは、周囲の蔑みや嘲笑を撥ね退けるように、そして嘲った彼らの目の前でBからA級のモンスターを相手に快勝して見せたのだ。

そしてその時の鮮烈にして過激な様と、その手に握る鎌で上級モンスターを容赦なく切り伏せていった姿から、彼女は 死神 の二つ名で多くのプレイヤーたちに畏怖され、ついには《十二音律》に名を連ねるほどの高レベルプレイヤーとなったのである。

リユージュも、ユウの戦う様を拝見したのは僅かに二度しかなかった。

一度目はゲーム時代。

二度目は、この ファンタズマゴリア ロケイン に顕現してから。

その二度の間に見せた彼女の戦う様子は苛烈であり、同時に流麗でもあった。見ている側がいつそ爽快感すら覚える鮮烈な姿だった。なによりゲーム時代、そしてこの異世界と化してからも、彼女の戦い方に迷いはなかった。多くのゲームプレイヤーがそうであるように、ゲームプレイ中は画面越しに映る状況を観察しながら次の行動を選択する。

通常攻撃にするか。

特技を使うか。

魔術を使うか。

あるいはアイテムか。

それとも防御か。

幾種も存在する選択肢の中から一つを選ぶのに、リアルタイム制のゲームなら一時停止ボタンを押して考えたり、ターン制のゲームなら何度も行動選択をやり直して、最善と思える選択をする。

しかしリアルタイム戦闘のMMORPGにそんなシステムなどあ

る訳もなく、一度の選択を間違えると即死亡——というのも珍しくはない。

だからプレイヤーの多くはほんの一瞬の間に様々な葛藤を胸に抱えながら、その状況下で最善と思える一つを選択するのだが——ユウの戦い方にはそれが一切垣間見えない、というのがリユージュの見解だった。

攻撃も防御も回避も、アーツ・スキルもバースト・スキルも、それらの発動の際の一連の動作には、コンマ単位の逡巡も存在していない。

それは ファンタズマゴリア が異世界と化してからも変わらなかった。ヒュンケルのヘルプに向かって再開した彼の呪葬鎌使は、ゲーム時代と何の変わりもなく一片の迷いも見せることなく、数十のモンスターに囲まれた最中でも舞っていたのだ。

《呪術》の闇を周囲で踊らせ、演舞の如く鎌を振り回す姿は、ゲーム時代の 死神 と謳われた『十二音律』の姿だった。

フューリアとは、そんなユウがこの異世界と化した ファンタズマゴリア に迷い込んですぐに知り合った盗賊^{シーフ}で、現在は上位クラス、隠刀士の少女だ。

種族はスキアエルフ。俗にダークエルフと呼ばれる、青白い肌を持った、通常のエルフやハーフエルフに比べてはるかに高い戦闘能力を持ったエルフ種で、地面まで届きそうな青みがかった銀髪を両サイドで括っているのが特徴。

最初に出会った頃は酷く敵意を剥き出しにされていたが、最近では随分と丸くなってきたような印象を受けているのだが、

（たまに切りかかれるけど……）

不意にその時のことを思い出し、リユージュはうんざりした様子で肩を落とし項垂れる。

（僕が一体何をしたって言うんだか……）

胸中で嘆きつつ、リユージュはしばし無言のままであったサクヤを見た。見れば彼女は完全に作業の手を止め、頭を抱えて溜息をつい

ているところだった。

その原因は自分なのだろうか。だとすれば心外なのだが、それはあえて口にはしない。良く分からないが、それは言っではいけないような気がしたのだ。

「なんか、聞くだけ阿呆らしくなってきたぞ……私は」

「なら聞かなきゃよかったじゃないですか？」

「うっさいわい！」

歯を剥き出しにし今すぐにでも噛み付いてきそうな語気に、リユーグは思わずたじろく。

「な……何を怒ってるんですか？ 姐さん」

「その理由理解しないお前に怒っている！」

叫びながら、サクヤは手に持っていた鎚をリユーグ目掛けて投げつけた。

「物凄い理不尽ですね、それ！」

言葉を切り返しながら、リユーグは投げつけられた鎚を慌てて受け止めつつ、

「そもそも僕の交友関係なんて大したもんじゃないですし。必要がなければ会いもしませんよ」

カウンターをひよいと飛び越えて店の中に入り、サクヤに歩み寄って鎚を手渡しながら何気なくそう言ったのだが、

「……ほう」

それが不味かったらしい。わずかに低くなった声音と、鋭利な刃物のように座った視線がリユーグを貫き、彼は鎚を手渡した姿勢のまま硬直する。

頬を冷や汗が伝うのを感じながら、リユーグは愛想笑いを浮かべながら一応尋ねる。

「えーと……どうかしました？ 姐さん」

「いやなに……今のお前の発言に、少し気になるところがあつてなあ？」

にこりと笑うサクヤの表情に、リユーグは全身の毛孔が泡立つよ

うな錯覚を覚える。そのまま摺り足気味に一步後退したのだが、リユーグのコートの端をサクヤの手がぐつと握り締めて、それ以上退くことを許さなかった。

そしてその体制のまま、サクヤはリユージュを見上げて尋ねる。

「お前は言ったな。『必要がなければ会わない』と……」

「は、はい……言いました」

サクヤの問いに、リユーグは嫌な予感がしてごくり……と、無意識に唾を嚥下する。

理由は分からないが、どうやら怒っているらしい。それも、そこ知れぬほどの怒気が、彼女の全身から溢れているように見えるのは、きつとリユーグの気のせいではない。

そんなリユージュの心境など露とも知らぬ——あるいは理解していても容赦しないだけなのか——サクヤは、

「つまり——お前は用がなければ私にも会いに来ないのだな？」

もしこの場に誰かがいたのなら、サクヤの言いたいことをなんとかしてリユグに伝えただろうが、幸か不幸か、今店内にはリユグとサクヤ以外の人間は誰もおらず、そして――

「え……まあ、そうなりますね？」

リ्यूグは最悪の返答をこの場で投下する。

刹那、サクヤが怒号した。

「——つの……大馬鹿ものがあああああああああああああ
あああああああ！」

「ええ！？」

サクヤの最大級の怒りの声を耳にし、次の瞬間振り上げられた鎚

が、容赦なく振り下ろされる様に、リユーグは声にならない悲鳴を上げた。

とっさに振り下ろされる鎚目掛けて両手を左右から叩きこみ、白刃取りの要領でその一撃をなんとか受け止めるも、

「ぬぐぐぐぐ！」

その体勢から、サクヤは更に力を込めてリユーグへと迫る。

「ちよっ！ 姐さんストップ！ ストップ！」

クラス剣聖とクラス鍛冶師では、職業補正による筋力パラメータが圧倒的に後者の方が有利なのだ。

男性だからとか女性だからとか、この世界ではあまり通用しない物を言うのはどれだけPCのステータスパラメータを鍛えているからだ。

サクヤはこれでも攻略組の最前線で戦えるくらい力量を持っている。そしてそれはリユーグも同じだが、サクヤは日々鍛冶師として武具の鍛錬をしているのだ。ただ剣を振るうだけのリユーグと、重い鎚を振るって鉄を叩き、武具を鍛えているサクヤでは、筋力値の成長度合いは雲泥の差がある。

力だけなら、リユーグよりサクヤのほうが圧倒的に高いのだ。

その力の差に、抑えているリユーグに向けて徐々に鎚が迫ってゆく。

「ちよ、どうして僕殴られるんですかー！？」

「黙らんか！ この女の敵がー！」

「分けわかりませんって！」

結局、この二人の攻防戦は、他の客が店を訪れるまで続いたのだ。

時刻はすでに黄昏時。

昼と夜の狭間——夕日が照らすユングフィの街路を通り抜け、リユーグはある場所を目指して螺旋階段を昇る。

「まったく……今日は酷い目にあつたな」

階段を一段一段律儀に踏んで昇りながら、リユーグはそんなことをぼやいた。半分以上自業自得と言つても過言ではないのだが、自覚のない本人はコートのポケットに手をつこんで螺旋を歩く。

やがて最上階に辿り着くと、リユーグは目の前にある重い鉄製の扉を開けて外に出た。

——ビュウ……という強い風が、頬を撫でた。

そこは、古都ユングフィにある巨大な時計塔の上——設置されている大鐘の間。

そこに、リユーグは立っていた。

同時に——ごん……という鈍い音が頭上から高く響く。

夕刻の終わり。夜を知らせる鐘の音が響き渡る。見下ろせば多くの住民がうごめいていた。

ある者は帰路へつき、ある者はその日の労働を労うために食事処や酒場へ繰り出す。

子供はまだ遊びたがるようにはしゃぎ、父母はそれを諫めて家へと連れてゆく——それは現実世界にいたころとなんら変わらない、夕方の風景。

リユーグは視線を眼窩から正面へ——沈みゆく夕日へと向け、僅かに目を細める。

時期にあの夕日も完全に沈み、代わりに頭上には月と星のちりばめた夜闇が佇むだろうと、一人感慨深げに微笑する。

この世界に来てから、ほとんど毎日この場所から見ていた。

人の営みも、沈む夕日も。

それは現実のそれと相違ない風景だった。

違うのは自分。

日口理宇ではなく、リユーグ・フランベルジュだという事実だけ。後ろの壁に背を預け、そのまま凭れかかるようにずるずると身体を落として足場に座り込む。

——そして目を閉じ、リユーグは自分の中にある記憶を掘り起こす。

自分の名前を始めに、そして家族の名前を次いで。

通っていた学校の名前。世話になった教師の名前。仲の良かったクラスメイトの名前。

好きだったこと。嫌いだったこと。

得意なことに、不得意なこと。

進学した大学での専攻した学科。受けていた講義。

簡単なことを思い出して行き、徐々に難しいことを掘り起こしていく。

それは、一種の儀式だった。

リユーグがリユーグとなる前——理宇である日々のことを。

それを忘れないように。自分に刻み付けるための儀式だった。

人間の記憶は徐々に劣化していく。それは毎日の出来事によって増えていく新しい記憶を残すため、古い記憶は睡眠の際に行われる記憶の整理によって徐々に廃棄されていくという話を、リユーグは何処かで聞いた覚えがあった。

同時に、そう簡単に人間は以前のことを完璧に忘れることはないというのも、また然りだ。

それでも、時たまに訪れる不安が、リユーグにこの儀式を行わせる。

これと言って、執着するほど大切だった記憶は多くない。だが、忘れていい記憶というわけでもない。

記憶とはその人間の過去の象徴。いうなれば、生きてきた証のよ
うなもの。自分の中にある過去の記憶は、個人を構成する大切な要
素。それなくして自分を語ることは人にはできない。

たとえばそれが——思い出したくない壮絶なものであったとしても、
だ。

閉じていた目を、リユーグはうつすらと開く。

時間にすればわずか数分程度だっただろうが、まだ春先であるこ
の時期では、日が沈む時間も早い。

気づけば夕日は大分傾き、空は薄らとだが夜を帯びていた。

「目を開けたら、そこには見慣れた蛍光灯の明かり——ってのは、
ないか……」

「——皆、そうだったらいいと思っているよ。私も含めてね」

声は、すぐ側からだった。

リユーグは振り向きながら視線を僅かに上へと向ける。そこには
長く伸びた、青みがかった銀髪が風に揺れていた。

リユーグと同じように壁に背を預けて腕を組む少女を見て、リユ
ーグははすかに目を見開いた後、くす……っと小さく笑って言った。

「流石にこの季節にその格好は寒くないかい？ フューリア」

「言うにことかいて、そう言うことを聞くな!？」

リユーグの問いに、フューリアは顔を真っ赤にして肩を怒らせな
がら叫ぶ。

だが、リユーグの問いも当然と言えば当然だろう。まだ春先。夜
は冷えるこの季節だというのに、少女の恰好はほとんど肌を隠す機
能がなく、上着は袖のない膝丈まであるコートだが、その下に着て
いるシャツは、胸元から下は臍へそも隠さぬほど裾がなかった。そして
下も太ももが丸出しのショートパンツという、酷く寒々しいもの。
寒そうなうえに、正直目のやり場に若干困る。

「防具としての性能は高いんだ。仕方ないだろう」

そう言われると、リユーグとしては何とも言えなかった。実際、彼女の纏っている服は隠刀士専用のAランク防具だ。回避性能が著しく上昇する効果を宿していることから重宝されている。

「まあ、君がそれでいいのなら、それでいいけどね」

「なら聞くな」

鼻を鳴らしてそっぽを向いたスキアエルフの少女の仕草に、リユーグはくつくつと声を発して笑う。

すると、

「……こつから突き落としてやるのか？」

「お願いだから止めてください」

酷く冷淡な視線で見下ろしてくるフューリアに、リユーグは素直に頭を下げた。彼女なら絶対にやる——そんな気がした。

フューリアは大きく肩を落として頭をふり、そして何でもないと様子で冷ややかにリユーグを見下ろしながら、淡々と問う。

「それで、お前のところの引きこもりは何か成果を見せたのか？」

「これが全然——っていうか、人の友人を引きこもり呼ばわりか？」

答えながらジト目で返すと、彼女はさも当然という様子で頷いて見せる。

「私の友人の想い人だな。ムカつくが……」

「酷い言われようだな、我が友は……ははっ」

そう言いながら、自分でもヒュンケルのことを引きこもりと呼んでいる以上強く否定はできず、リユーグは声に出して笑う。

「そういう君の方は、なんか成果はあったかい？」

「……あつたら此処に来たりしないさ」

むすっとした表情で答えるフューリアの様子に、リユーグは「だろうね」と頷いて肩を竦める。

「何処も八方塞がりか……どうすれば帰れるんだか」

「それを探っているんだろう。私たちは」

「その通りだね」

にべもない返答に、リユーグは虚空を見据えながら肯定した。

「結局、僕たちにはそれしかない。現実へ帰る——それ以外の主だった目的がない以上、それを探し続けるしかないのかあ……」

「随分やる気がないな。まさか、帰りたくないのか？」

「それこそ——まさか、だよ」

そう言つてリユーグは頭を振つた。

「帰りたいに決まつてる。やりたいこと、やらなきゃいけないことが、幾つもあるし……ね」

リユーグはそう言つて、口を閉ざす。

フューリアはリユーグのその言葉に「そうか……」と一言だけ答え、同じように言葉をつぐんだ。

二人の間に沈黙が座す。

気づけば夕日は完全に沈み、空は夜色に染まり、星の光が空に瞬いていた。

夜の風が二人の頬を撫で、その髪を揺らす。

二人は夜の闇に彩られる街並みを、ただ何も言葉を口にすることなく見下ろす。

眼下に広がる営みの数だけでも灯された明かりが広がる風景が、そこには広がっていた。

——《来訪者》の誰もが、現実へ帰ることを夢見ている。

攻略組は、その先に帰る手段があると信じて日々奮闘する。

そうでない者たちも、自分たちの考えを以て各々が動く。

二年に近い歲月の中、彼らは ファンタズマゴリア を奔走する。

されどその行く末は見えぬまま、彼らはこの異界を彷徨い続けていた。

A c t 3：行く末は見えず（後書き）

11月中と言いながらすでに12月になってしまいました。でも出来上がりました。A c t 3です。これにてプロローグ『リィヴァー』が終了——のはずです。次回から第一章が開始されます。出来るだけ早めに掻き上げるよう努力しますので、どうぞよしなお願います。では。ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3664x/>

リ＝ヴァース・ファンタジア

2011年12月3日23時47分発行